
サイドエフェクツ-薬の鎖-

星空の闇に消えた男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイド エフェクツ - 薬の鎖 -

【Nコード】

N0660N

【作者名】

星空の闇に消えた男

【あらすじ】

人間の悩める“こころ”を医学における専門分野としている精神科医・播野。高学歴ないわゆるエリートで地位や財産も築き上げてきたが、気がつけばいつの間にか、若き日の頃の“精神面で多くの苦しむ人を救いたい”という理想が色褪せている現実に頭を悩ませていた。

そんな遣る瀬ない物思いに耽り始めた彼であったが、今日もまた、変わらぬ同じような診察が始まるうとしていた・・・

DATA 1 播野医師

? 播野医師

「先生、この子の病は治るんでしょうか」

「御心配なく。未永く治療を続けていきましよう」

.....
受付が閉まった六時過ぎ、播野は、勢い衰えた狸のように、机で小さく身を縮めて、今日訪れた全ての患者の症状やその経緯いきざつなどをパソコンを打ちながら整理していた。いつもと変わらぬ何の変哲もない月曜日が、未だ肌寒さ感じる弥生の夜にまた包まれてゆく。

「はあ。杉浦さん家は立て続けにペットも含め四人もねえ。あつ、いや、ペットは動物だから二匹か……」なんてジョークにもならぬ独り言を、時にぼそぼそと呟きながら、シミの所々に付いた黄色く薄汚れた肌を時々左手で軽く掻きむしる。そして、その曇れた表情を自ら厭うように眼をつぶり、頭を左右に小刻みに動かす。

「はあ……」直ぐさま顔を俯かせて、暫しの間、空っぽの眼でキーボードを見つめる。

既に精神科医になって二十九年の月日が流れる。毛先の整った頭には雪に覆われ始めた山の頂のように、白く染まってきていた。これまででいっただい、幾人もの患者を眼にしてきたのである。播野は、頬杖をつき獣のように黄ばんで穢れた眼を閉じ、病院勤務の時代から独立して現在に至っている今日までを振り返る。

(思えば楽なようできて、全然楽でなかったな。この仕事は……
.....)

“ 楽なようできて楽ではなかった ”

この今となつては責めようもないどうしようもない思いが、播野の脳あたまをズキズキと徐に釘を打たれていくかのように刺すのであった。

(まだ病院にいた時はね、自分も若かったし。陰で未熟な私を支えてくれる医師も傍にいたが……。十八年前に独立してからは日々の業務は自身できちんと律していくしかなくなった。まあ当たり前前の事だが……。何もかも、メンタル的な面でももちろん……)

診察室の椅子にうなだれたように腰掛けて身じろぎしないまま播野は、両手で顔を覆い隠し、若かりし頃の追憶が、現実とのギャップを引き立てていた。

“トントン”

「先生、お先に失礼します」

「……あ、ああ。つていうか、お、お前帰る時には此処をあからさまに覗くなつて言ってるだろ。内線で呼び出してくれ、頼むから」
机に肘をついて、白髪頭をいじりながら両手で顔を覆い隠していた彼は、我に帰り、肉付きはあるがどこか血色の良くない顔つきをした受付の女に面倒臭さそうに注意を促した。

「えっ、だって先生いくら呼び出ししても何も反応なかったのだから帰りの挨拶くらいしていかなきゃと思つて、つい……」

長身の蒼白な顔つきをした受付の女は、自分が過失を犯して申し訳ないように気弱な声で弁解した。

「もういい。わかつた、出てつていいよ。お疲れさん」

“バツタン” 受付の女は力無く診察室のドアを閉めると、細長い階段を足早に駆け降りていった。

「まつたく。あの女もあれなんか墮ちてなきゃな。今頃は……」
再び一人になった診察室で、そう播野は俯きながら気にかけるように呟いた。もう己の他に誰もいない。細々と今日訪れた、特に新規で来た患者のデータを改めて見直してみる。

「金原、安崎、富谷、伊藤、呉、中畑。六人か。みんなそれぞれ事情は異なるものの、共通していえる事は鬱病の要素を多分に含んでいるという事だ。夜眠りに就きにくいというのが、富谷さんだっ

け。」

「……フツ……」

（まあいい。どうせ、……いつもと変わらない毎日が過ぎてゆくだけさ）

顔は年齢のせいか、黄ばんで所々にシミができ糞れた表情をしてはいるものの、ぱつと見律儀そうな紳士の風貌をしたこの医師は、ニヤツと意味深な薄嗤いを口元に浮かばせ、すぐ傍に置いてある煙草をそつと引き寄せた。そしてそれを箱の中から潔く舌に忍ばせ、先程とは違った悠長な面持ちで紫煙を燻らした。

《セブンスター 「タール」 12??》

「フツ、こいつもあの女が振り回されたやつと同じ類だな……。」

「……ああ、もうこんな時間か。さあて、おしまいにしようか。薄弱な者の事は一時忘れて……」

播野は、欠伸あくびをしながら両腕を上に戻らせて大きく背伸びをした。時計の針は八時をさしていた。

「よしっ」

少し乱暴に今腰掛けていた開店椅子を机に片付けると、来ていた白衣を素早くハンガーに掛け、灰色のスーツに再び着替え直した。そして、幾らかの書類やファイルを入れた大きなビジネスバッグを片手に持ち、自分以外誰もいない病院を後にした。

「ふあゝ眠い……」 翌朝、播野は午前七時過ぎ、いつものように自分が開いている医院へと向かう。毎日彼は、自宅と其処とをタクシーを使って勤務している。一等地の優に百坪を超える邸宅から往復二万円にもなるのであるが、年収一千万を超える彼の金銭感覚からでは言うまでもなくちよるいものであった。

「昨日は少し買い過ぎたかなあ。さすがにマクドのバリユーセツト三つにシェイク二つは。はあゝ」

「ハハハ。先生、いくら何でも暴食は良くないですよ。まだ平日なんだから」

「いやいや。暴食なんかじゃないよ、常石君。昔からお昼休みには医院の近くにあるマクドばっかり行ってるんでね。すっかり食欲の虜になってしまったよ」

「医者の不養生なんてのにならないように気をつけて下さいね、先生。まだまだ現役なんですから」

朝の行きのタクシーの中で、播野は痩せこけて銀縁の眼鏡を掛けた馴染みの運転手とたわいのない会話を弾ませていた。一見物静かそうな感じであるが、話し出すとほとんど降りるまで舌が回り続けるのであった。

「はい、どうも。お気をつけて」

七時五十分、播野はようやく医院の前の駐車場を降りる。建物の横にあるブナとミズナラの落葉樹が今朝も陽の光を浴びて山吹色に煌めいていた。

「あゝあ。今日も患者を相手に同じような一日が始まるのか……」
細長く急な階段を昇りながら、彼はこれから始まる一日が億劫に感じられて、ついぼやいてしまう。

いつもの事であった。それでも診察が始まれば、患者を眼の前にして、誠実そうな穏やかな表情で接しなければならぬのである。心病んでいる者のこれまでの経緯を、まるで自分事のように聞き、そして、その経緯や患者における今の心の状態をパソコンのカルテに打ち込み、最後に患者に見合った最も適した処方箋を出してあげる事だ。口には表さずとも、播野の脳裏には、ペイシャントに対する一連のプロセスは出来上がっている。

（しかしね。そうはいつでも……）

（色んな奴が来るからなあ。メンタルで悩んでる奴っていうのは……）

播野は近頃、といってももう大分前からなのであるが、様々なクライアントに接する事にある種の限界を感じていた。彼らは日常生活

活において絶えず精神不安定になるといい、何もかもやる気が起きないと症状を訴えてくる。精神科医になつたばかりの頃の病院勤務時代は、少しでも心に悩みを抱えている患者の苦しみを取り去つてやりたい、いや俺ならどんな未知なる大脳の分野を研究し、たとえ今は薬を少し余分に与えてでも病んでいる人達のために尽力を尽くそうと思つていたものだが、ここ数十年前からそうした揺るぎない情熱は、徐々に薄れていった。脳の分野はどんなに研究しても未だ神秘に包まれているのが現状である。多くの新進気鋭の若手の医師らは学会に自ら得た研究成果を発表してはいるものの、それらが実際の諸々の精神病の治癒に期待できるかといえ、現実にはまだ数々の患者に応用できる段階には至っていないのである。

(学部出たばかりの若い連中はいいよ。まだまだ爾後、未知なる大脳分野に没頭できて、それが後々患者の治療にも生きてくるかもしれないんだから)

診察が始まる前、播野は最近しばしばこのような自らを精神科医として誇りに感じる事ができないような物思いに耽つていた。

“ピーッ”

受付から呼び出し音が鳴った。

“トントン”

「はい」

「先生、おはようございます。」

「おはよう」

「……………」

「ん？何その暗い顔は。どうかしたの？」

「あつ、先生、それが……。朝いちで予約していた権藤さん。急に今日体調のほうが悪くなってキャンセルしたいっていう電話が今さつきありまして……」

受付を任されている長身で若い女だが些か顔色の良くない野尻は、播野の顔色を窺いながら、声の調子を抑えて伝えた。

「ふん。…で、私に代わるようにと言わなかったのか」

「す、すいません。相手のほうが先にバツサリ切ってしまったって……」
「近頃ドタキャンが多いのわかってるだろう、君も。……まあ、仕方ないが……。後は患者の心の持ち方次第だろう。権藤さんなら心配いらなんでしょう、まだ若いんだし。……それより、狩川にも伝えておけ。ドタキャンの電話が来たら、すぐ私のほうへ廻すようにと」

播野は一人一人のクライアントに接する時と同じく、砂漠のように乾ききった表情のない顔で、吐息雜じりに諦めの籠った口振りです野尻に伝えた。

「通院期間は六ヶ月だったか。今日あたりまた採血して、それから新しい薬をもう一種類出してやるうかとも思ってたのに……。予想しない人にこうやって毎回ながら裏切られるんだ。」

（秀でた才能を持つ人物の末路はいつも惨めなのか……。いや……。……）

いや、違う、自分は決して大衆から抜きん出ているほどの才能を持った男ではない、また人から称讃されるべき人物ではない、なんて事は播野自身が微塵もなく疑うところはなかった。医師という大勢の人々から一目置かれる職業でありながら、播野は医者として今、莫大な金を得ていることに自ら軽蔑しているようでもあった。難関国立大を次席で卒業し、精神医学の分野に心血を注ごうと努めた若き日の診療室の自分が、一瞬脳裏を過ぎった。だが、五十代に入った彼にはもうそんなことはどうでもよかった。

（私は罹病の患者を精魂込めて救ってあげるところか、今は……。……）

これ以上、自分を責め続けるのは良くない、それはもうずっと前からわかっている。しかし、年齢を重ねる毎に、播野は医師として保つべき品格や患者に対する自身の接し方疑問を持つようになっていったのであった。

（まあもちろん、クライアントも十人十色ではあるが……）

“ピーッ”

午前八時四十分。診察時間が始まってからも絶えず、内面にいる誠実な自分と対峙していた時、患者が来た事を知らせる合図の音が鳴った。播野はパソコンにすぐ眼を移し、診察予約の一覧が記載されているファイルを開いた。

「え」と、今日最初のクライアントは山橋さんか」

播野の表情は凜と引き締まり、昨日と同じいつもと変わらない診察がまた今日も始まるうとしていた。

DATA 2 変わらぬ今日が再び

？様々な患者との対応、患者の病に至る経緯

「はい、診察札五番の方どうぞ」

“トントン” 大人しい子羊のように気弱そうにノックする音が聞こえる。

「はい、どうぞ」

「お、お願いします」

一九〇センチはあるかと思われる、グレーの縁の眼鏡を掛けたのっぽの男が少しおどおどしながら入ってきた。今日最初の患者であった。

(うゝむ。比較的軽度のパニック障害を患っているといったところか…)

播野は即座に、患者が先日話した、症状に至る経緯に目をやりながら、該当するであろう精神疾患をあてはめようとした。

「はい。その後調子はどうですか」「ええ。初めて来た三週間前と比べますと、何となく落ち着いてきたかな…と。お薬のセルシンとホリゾンを毎日飲んでるので、はい 一応」

「満員電車の中で、まだ不安感に襲われたりしますか」

「そ、そうですね。一、二ヶ月前はその場で卒倒するくらい頻繁に起こってきて酷かったですけど、今は、通院してからは大分その不安感は消えてきてますかね」

「薬が効いてきている証拠でしょう。今回も同じお薬出しますので、このまましばらく治療のほう続けていきましょう。はい では今回は、三週間くらいあけて四月十一日の金曜日の九時は如何ですか」

「あつ、はい。大丈夫ですけど」

「それでは、次回の診察、十一日でお待ちしております」

「今日も、ど、どうもありがとございました」

「お大事にどうぞ」

男はたどたどしく椅子から立ち上がり、軽く播野にお辞儀をすると、素早く診察室から出ていった。

（なんなんだろうか…あの蛇に睨まれた蛙のような頼りなさげで、それでいて猜疑心の籠ったような眼つきは……）

播野は、もう幾度となく見馴れているその表情を憐れに思うと同時に嫌気もさしてきていた。

（まあ、山橋さんの場合は仕方がないか。朝の満員電車の中で痴漢冤罪を経験した身だから。）

（……さて、次いくか。次はちと厄介だな……）

「はい、診察札十番の方どうぞ」

「はい……」

幾分腰の曲がった中年の女が、夫らしき白髪の男性にドアまで付き添ってもらって入って来た。戸嶋というこの中年の女は、実家を離れ嫁いでいったまだ三十路前の愛娘が、二年前突然、不慮の事故で亡くなってしまい、精神的にかなりのショックを受けたのであった。我が子がこのように先に他界してしまえば、どんな親でも、悪鬼のように残酷でなければ、いたく悲しむのは言うまでもない。しかし、温厚で神経質な性格が祟ってしまったのか、すぐに彼女は外出もろくに出来ないほどに気分は塞ぎ込みがちになっていった。いわゆる“抑うつ状態”に入ってしまったのである。以来、それまで一人で愉しんでいた編み物やガーデニングにはどういいうわけか自ら好んでやる気にはなれなくなってしまった。気分転換を図るため、たまに亭主に誘われて行った二泊の温泉旅行でも、旅館では気分が何とか安らぐのであるが、再び家に帰ってくると亦、いつもの気持ち晴れない、何しても無気力状態が続いてしまうのであった。それだけではない、抑うつ的な気分と伴って、眠れない日々が続く事となった。寝付きが非常に悪くなり、眠れてもすぐに夜中短時間で目が醒めてしまう。薬局

で市販の漢方薬等を飲んでもなかなか症状が治まらず、こんな生き地獄の状態が約一年も続いた。近隣の茶飲み友達に仕方なく勧められ、この播野が開いている心療内科をようやく思い切って訪れて見ようか心に決めたのは昨年春であったという。医院近くのブナの樹々の葉は蒼々と若さを取り戻し、彼女の通院生活はもう既に一年が経とうとしていた。

「はい。その後、調子は如何ですか」

播野は、やや重い症状のクライアントを眼の前にして一呼吸して気持ち落ち着かせながら、例の紳士的ともいえる声色で話し掛けた。

「…え、ええ。先生が毎回出してくれているデプロメールとパキシル、それにベンザリンとエリミンをきちんと飲んでいきますので、何とか。此処に初めて来た時と比べれば大分楽になってきております、はい」

「そうですね、良かったですね。進んで物事に取り組む意欲のほうも出てきましたか」

「ええ。近頃は料理のレパトリーを増やすことが楽しみで、主人も喜んでますし。この齢になってむきになるのも恥ずかしい話なんです…」

「そうですね」

(パキシルなどのSSRIには、強力な向精神作用があるからな食欲不振や性欲異常などの依存性ある副作用もそれと平行してあるが…。まあ、今回もこれを続けて出すことにしよう)

「睡眠のほうも安眠出来てますか」

「ええ。こちらもお蔭さまで、何度も途中で目覚めて寝た感がほとんどしなかった一年前がまるで嘘のように、今はお薬飲めば、寝付きも早く、ぐっすり眠れております」

「そうですね。それは良かったですね」

(うむ 睡眠も安定してきているね。よしっ、今回からはベンザリンの代わりに塩酸リスマザホン系のリスミーを出してみよう。こ

の眠剤は短・中時間作用型だが、今聞いた様子なら多少薬を和らげたほうがよかるう)

「はい。このまま焦らず治療のほう続けていきましょう。お薬のほうなんです、眠剤のほう多少和らげたものをベンザリンの代わりにお一つ、今日から出しますね。床に就く前で結構ですから、新旧それぞれ一錠ずつお飲み下さい」

「あつ、はい。わかりました」

「それでは次回なんですが、少しまた期間を開けましょう。五月十二日曜日の午前十時は如何ですか」

「ええ。大丈夫ですよ」

「では次回、五月十二日でお待ちしております」

「ありがとうございます、先生」

中年の女は丁寧に深々と頭を下げると、ゆったりとした足どりで幾分腰の曲がった格好してドアを開け、再び亭主に付き添われて待合室に戻っていった。

(やれやれ……いくら落ち着いてきているって言われても、聞くほうは神経遣うなあ……こういった身内の、特別辛い不幸を経験した患者には毎回の事ながら身につまされるよ)

播野は、今さっきの中年女の患者の、前回通院した時から今日まで此処に来るまでの症状や現況・変化などを整理しながら、苦い溜め息を吐いた。それでもいつもと変わらぬポーカーフフェイスで、鄭重へていちよう〜にキーボードを叩きながら文字を打っていく。端から見るとそれは、人間臭いロボットのようになんか滑稽にも映るが、本人は至って真面目なのであった。

(さて、次は……次もまた少し厄介だな……)

「はい、番号札十二番の方、診察室へどうぞ」

「……………」

アナウンスで待合室に声をかけるが、三十秒経っても無反応である。それまで播野は泰然としていたが、苛立ちを表すように左手に握り拳を造って

「番号札十二番の方！」

（あつ、まずかったな。又ついきつい調子で放言してしまった）
播野はぱつと見温厚そうな割りには、些かせせこましい性質も持ち合わせていた。己のちよつとした悪癖を弁解するかのようになり、直ぐさま彼は白髪が多分に混じった頭を軽く片手で掻きむしった。

「失礼します。さつきは呼ばれてたのにすみませんでした」

と、色白で顔色のあまりよくない三十前後の若い女がそそくさとして入ってきた。

「いえいえ。先川さんですね。あれから具合のほうはどうですか」

「はい。俄かに良くなってきたわけではありませんけれど、でもゆっくりと安定した気持ちを取り戻してきているかなって感じですが、ただ、未だよく熟睡できない夢の中で、暴力を振るわれた主人が出て来て、強烈な恐怖に襲われる事もあるんですね」

「はは、フラッシュバックというやつですね」

フラッシュバックとは強いトラウマ体験をした場合、日数を隔ててから突如としてその苦い経験が甦って思い出されたり、夢に出てくる現象である。

症状に至る経緯には

この先川美佐子という女、現在は妹の家に居候しているが、半年前まで、別れた夫と二歳半になる子供と一緒に暮らしていた。がしかし、あまりにも夫の家庭内暴力が酷く、顔に赤黒い痣々あざ々ができるまでになっていた。二年ほど前から、いわゆるこのDVの被害に遭っていたのであった。最初の頃は日常的に罵声を浴びせられたり、休みの日に友達と無理矢理合わせないなどの精神的虐待だったが、いつしかそれは、美佐子に容易に拭い去る事のできない無実の烙印を家庭内で押されていくのであった。夫の勤めていた某中小商社の業績が悪化し、彼女の夫は不運な事にリストラ対象になってしまったためか、十年間ひたすら黙って会社の言いなりになってき

た夫も、あと一月で辞める事が決まると、温厚で真面目な気質が嘘のようになっていた。家に帰宅してからの生活がまず、荒々すさんでいったのであった。それまで毎日飲まなかった酒を、ビール缶二、三本は毎日軽く開けるようになったのであった。それだけでは止まらず、日本酒、ワイン、ウイスキーと、呑んだくれのように遣る瀨ない顔をだらしく赤く染めていった。このままではいけない、何とかやめさせな

きや…、妻であった美佐子は言い渋って噤んでいた重い口を開いて、やんわりと泣きじゃくっている病人を宥めるように、気持ちを落ち着けるようにと声をかけて励ましもしたが、美佐子の夫は聞く耳持たずで、お猪口に注ぐ右手は止まらなかった。

(もう…どうしたらいいんだろ…) そんな彼女の募りゆく不安に煉獄のようなさらなる暴君ともいえる鞭が加えられるようになるきつかけとなったのは、夫が会社を辞めさせられてから、一ヶ月ほど経ったとある日の夕食後の出来事であった。それまでの間も美佐子は夫の事情を気の毒に思い、その変わり果てた姿をドアの間から恐る恐る見守っていたのであるが、ふと玄関のほうに足を運ばせると、何やら一通の葉書が電話機のすぐそばに置いてあったのであった。

(なんだろう、これ……………はっ……………)

一瞬にして、美佐子に、冷たいガーゼを首に当てられたような寒気が趨^ほつた。それは、夫宛ての某大手消費者金融からの督促状であった。

(数百万も借りていただなんて……………いつの間に……………)

「おい、美佐子どしたんだあ？」

(……………はっ……………)

ついさっきまで微かに感じていた、か弱い兔が臆病にこちらを覗いてような気配が消えたので、夫は食卓を出て、茹で上がった蛸のような真っ赤に染まった顔をこちらに見せた。

(……………はっ、しまった……………)

「なんだあ、それは？」

マリアが何かの熱病のように真っ赤な表情に、野性動物のよう
なぎらぎらとした瞳孔を湛えながら、美佐子のほうへと徐にやって
きた。

「……………あつ、これは……………」

「それ見せるよ」

手に持っていた督促状の葉書を背中の中へ隠そうとすると、夫
は直ぐさまそれを引つたくるように素早く取り上げ、

「お前、なに人を見てんだよ！！」

と、彼女の肩を強く抑え眼前で赫怒した。

「……………あなた、何なのそれ？」

美佐子は、まさかの出来事に狼狽した顔色を隠せず、その葉書
の内容を確認したくなって、夫の手から取り返そうと幾分躍起にな
ってせがみ続けたりもしたが、

「うるせえんだよ、お前は！！」

“バアアア”

と、美佐子を怒鳴りつけながら床に突き倒した。これが、DVに
おける身体的虐待の始まりであった。彼女はあまりに豹変してしま
った夫の態度に、恐怖を覚えてしまい、暫くその場から動く事さえ
出来なかった。無情にも力無い女を張り倒したその男は、督促状の
葉書を掌中で握り潰しながら、階段を昇り、寢室のほうへと消えて
いった。その千鳥足の後ろ姿はまるで、責められても致し方ない自
らの非に頑迷に負けまいとするかのように美佐子の眼に映った。震え
る手を床に付けたまま、彼女はまだその場から動く事が出来なかつ
た。何十分くらい、我を失っていた事だろう

「ワアー……ワアー……ワアー……アウアウアー……」

突然、甲高く、金属で擦り切るような幼い泣き声が長く伸びて美
佐子の耳に届いた。それは、未だ生後七ヶ月の娘であった。一ヶ月
くらい前から夜泣きをし始めているが、今の乳児の泣訴が自分と夫
とのさっきの小競り合いで起きたんだという事は、彼女にもすぐわ

かった。

(萌々香、ごめんね)

DATA3 DVという日常の恐怖

まだ床に身を伏したまま、美佐子は祈るように両手を重ね合わせ、顔を少し俯けて瞼を閉じた。そして、三十秒くらい懺悔をしているような格好でうずくまっていた直後、また

「うるせーんだよ、この野郎」「ガチャーン」

グラスをテーブルに叩きつける音が聞こえた。赤ん坊の泣き声に触発されて、もはや大きく感情を抑制する事を失った夫は、再び業を煮やし、今度は“物をぶつける”という行為に出たのであった。これも身体的虐待の一種に含まれるのである。

「あ、あなた。もう止めて！」

美佐子はやつと身を起こして階段を駆け上がり、酒に爛れてしまった夫をまた優しく窘めようとした。怖ず怖ずとノックしてドアを開けると、先ほどのグラスが破片の塊になってテーブルに飛び散っていた。夫は水色のソファにしゃがみ込んで、みっともなく白いシヤツの裾を片手でパンツの中にたくしこんでいた。

「……………ごめん、俺が悪かったよ、大人の癖についムキになりすぎた。おまえに手だしもしちゃったね。許してくれ。……………だけど、この葉書の内容に関してはあまり責め立てないでほしい。……………ただ、それだけさ……………」

「ええ、わかったわ。」

彼はいつものように無言のまま左手の親指で、もう一緒に寝室に向かおうという合図を美佐子に送った。美佐子も無言のままうなずいた。

（……………今日は本当に疲れた。ゆっくり寝よう）

そう思いながらも、彼女が眠りの世界に落ちたのは、深夜四時を過ぎてからであった。

明くる日の朝、美佐子は八時半頃目が覚めた。すぐ隣の枕を見ると、昨晚、連れ合いに拳を振り上げてしまった男の姿はもうなかつ

た。

(毎日どこへ行ってるんだらう、働いてもいないのに…まさか歴史あそこに行ってるんじゃないか……)

そう、やっぱりお金をじゃんじゃん使い果たして行くとしたらあの場所しかないだろう、と彼女は半ば覚りの溜め息を洩らした。

「雲隠れしないでほしいわ。まったく…」

そう、ぼそぼそと呟きながら、美佐子は夫の部屋へ肩を落としながら歩いていった。中へ入り、旦那が留守なのをいい事に彼女はガサゴソと置いてある物をいじくり始めた。会社に勤務していて平穩に時が流れていた頃は、整理整頓されていた彼の部屋も今や、物の見事に雑誌などが散乱していた。その不揃いになって積み重なってある束の下のほうをちらりと覗くと、何やら俗悪な彩りのする雑誌が目にとまった。そして、本の棗にするようにその間には、数万円のお札が忍ばせてあった。

「やっぱり………」

案の定、美佐子が思っていた通りであった。会社を首になり心神萎えていった男は、酒を浴びるほど飲んでいただけではなく、落ち込んで憂鬱な気分を紛らわすため、パチンコに手を出し始めていたのであった。

「いったい、いつから……あんな金額に……もし、帰ってきたら………」

(問いただしてやろう……い、いや……それは止めておこう……) まだ子供を産んでから一年も経っていないこの女は、我が身と幼い赤ん坊のこれからを憂慮して、ついうっかり滑らせてしまいそうな口を今日だけは堅く閉じていようと心に決めたのであった。

「でもどうしよう。借金してるなんて、家計や私達の生活にも影響が出てくる訳だし、いつまでも目をつぶってなんかいられないわ」

夫の部屋を出て、夕食の準備に取り掛かりながら彼女は、早くもその堅く己に誓った小さな戒めを、結局は胸の騒ぎに打ち勝つことができなかつた。

「ただいま」

夜八時過ぎ、一人先にご飯を済ませ、食卓のうえに気怠そうに顔を臥せていると、夫の声が玄関から聞こえたので、

(…ハツ……)

「あつ、矩史。おかえりなさい」

美佐子は慌てて出迎えに玄関へ足を運んだが、彼のほうはそれきり何もいわず、そのまま自分の部屋へ入っていった。

「あああつ、なんでこれが見えるところにあるんだあ」

と、夫は電灯をつけるやいなや驚愕した声を発した。

(はっ、しまった。元に戻すの忘れてた……)

“バーーン、バーーン”

雑誌の束を幾度も壁と床に叩きつける音が耳についてきた。製本機から飛び出した冊子のようにそれは、下で怯えの表情に変わりつつある美佐子のいる玄関口にも反響した。どうする事もできず、彼女はその場に立ち竦んでいたが、しばらくするとその投げつける音は罵声とともに止み、代わりに夫の荒い息遣いが聞こえてきた。そして、扉はふと開き

「おゝい、美佐子。今日俺の部屋勝手に入ったか」

「あつ、ご、ごめんなさい。つ、つい、まだ昨日あなたが割ったガラスの破片が細かく飛び散ってんじゃないかと思って」

彼女はどきまぎしながら、とっさに適当な嘘をついた。

「いいか。よく聞けよ、美佐子。結婚して二人の生活に入ったら特にプライベートには干渉しないようにって、約束したじゃないか。自由にふらふら付き合ってた頃とは違うんだぞ。まして部屋に入るだなんて言語道断だ」

階段下りる手前の廊下で、腕組みしながら直立したまま、彼は屹度なっていた。

その眼は昨夜と同じように、濁って少し威嚇しているようであった。美佐子もずっと夫のほうを弱々しく見つめていたが、何か自分が本当に悪い事をしたような気がして、暫くすると視線を下に遣って

しまった。しかし、まもなくして、彼女はふっ切れたように再び夫の表情を見上げ

「ねえ、あなた。何も隠す事ないでしょ。わたし知ってるのよ、あなたがギャンブルに嵌まって抜け出せなくなっている事を」

「チエツ」

美佐子は俄然、窮鼠のように毅然とした態度に切り替わり、表情も悔しそうに硬張っていった。矩史は逆に悔しそうに顰めつ面になつて舌打ちをし、

「だからよお。なんで人の部屋勝手に入るんだ。そんな権利お前
にないだろ」

「あるわよ。わたしだつて一人で暮らしてるんじゃないの。たまには様子見たくなる事だつてあるわ」

彼女は自身驚くほど強気に言い返した。

「もういい加減話して。昨日の夜のあの督促状は何？どのくらい借金してるの。お願いだから正直に教えて」

美佐子の顔は火照りはじめ、自分でも興奮して話しているのがわかつた。

「うるせーんだよ。関係ねえだろうが」

“バタン”

表情をさらに顰めて、そう吐き捨てた夫は後ずさりして自分の部屋に入ってしまった。夜の帰り道、自ら買ってきたのか、グラスにぐびぐびと麦酒で虚しさ+を紛らわしているのが、彼女の耳に入ってきた。

（今日は諦めるか…あんまり急に諫めすぎても良くないし……）

美佐子はまさかの晴天の霹靂の事態に、大きく肩を落としながら、階段を下りていった。

再び、夫が彼女に暴力を振るつたのは、三日後、美佐子がまた矩史の部屋を、件の葉書がないか勝手に漁っているところを見つけてからであった。妻の髪を引っ張り、顔面に平手打ちを食らわしたのであった。これがDVにおける二回目の身体的虐待であった。それ

からというものの、この配偶者による一方的な家庭内暴力は日を重ねる毎にエスカレートしていくことになった。会社から解雇予告を言い渡された後、それまでひたすら真面目に会社の為に尽くしてきた生真面目な男は、懊悩しすぎたせいか転げ落ちるようにその誠心は廃^{すさ}んでいき、規則正しい生活もたちまち放縦になり、横暴な態度で彼女に接するようになってしまった。ギャンブルにのめり込み出したのもリストラが決まってかららしく、既に借金の総額は軽く三百万を超えていた。この“無計画に借金を繰り返す”という行為も、DVにおける「経済的虐待」に該当してしまうのである。矩史はサラ金に手を付けてしまったため、一日でも早く返済しなければ利息が益々膨らんでしまう事を考えると、美佐子は放心など決してしていられたなかった。何とか言い解いて本人のためにも止めさせたい、そう逸^{はや}る気持ちを抑えられず、つい高談に早口で感情が言葉に籠ってしまったのがいけなかった。自制心を失っていて、妻のそれを売り言葉と受け取ってしまった夫は、すぐに彼女に

「ああ？今まで養ってきたのは誰のおかげだと思ってるんだよ、コラ。能無し女が、出ていけ！」

などと、悪鬼のような剣幕で美佐子に怒鳴り散らし、揚げ句の果てには、蹴飛ばしたり、首を押さえ付けたりして粗暴な行為に出る始末であった。時には、物を投げ付けられたり、家庭にある物を壊されたりもした。このような波瀾が起きる度に、幼い赤ん坊はまるで自らが責められたように声高に激しく泣きだした。彼女が名前をちゃん付けで呼びあやそうとすると、夫はそれを遮り、まだ一歳に満たない乳児にも訳もなく憤った。何の理由もなく、日常会話で配偶者や子供に“出ていけ”“殺すぞ”などと脅迫するのは、『DVにおける精神的虐待』の一つに数えられるのである。この生き地獄のような、辛酸を嘗め続けなければならぬ日々が二年ばかり続いた。無慈悲な暴力は時に火に油を注いだように烈^{はげ}しさを増し、美佐子と幼子を苛ませた。心の奥深くから聞こえてくるであろう良心の呵責から逃げるように夫は、浴びるように酒を飲んで一人きりで喚き

だす始末であった。深夜零時近くになつて突然、妻の部屋に押し入り、性交を強要する事もあった。大概是愛情の徴としての戯れが、行きずりの若い女を犯すような態度で彼女に罵声を浴びせながら無理矢理やらせた。この際、普段では考えつかないような特別な行為を妻に要求する事も頻繁に起こつてきた。これは、DVにおける『性的虐待』の一種である。他にも昼間は友人と合わせないなどの嫌がらせを行い、妻を苦しませた。警察や相談機関にも打ち明けようとするが、夫にどこかで見張りされていると思うとそれだけで気持ちちは塞いでしまい、行動に移す事はできなかった。

「もうこれ以上この人といたらわたし自身が死の道を歩んでしま
うわ」

とある日、殺伐としてもはや夫婦とは呼べなくなつていた生活にいよいよ堪えるべき限界が来てしまった。それはまだ残暑厳しい八月の下旬に入った日の午前中であつた。アル中と化してしまつた夫に監視されていることなどもうびくびくと怖れている気力さえなくなつたのであつた。すすすす二歳半まで成長した娘を一人部屋で寝かせておき、美佐子は少し遠くのスーパーマーケットへと出掛けていった。それはただ公衆電話を使うためだけの事であつた。まさかの夫の膨大な借金生活の為に家計は忽ち火の車となり、それまで使つていた携帯電話も解約せざるを得なくなつてしまつたからである。顔にも痣が気の毒なくらい残っている女は、着くとすぐに埃臭い受話器を片手に取り、二つ歳の離れた妹と話をするため、幾分小刻みに震えた指先で番号を押し出した。

“ トウルルルル… トウルルルル… トウルルルル… ”

公衆電話から掛けているせいか、妹の携帯にはなかなか繋がらなかつた。そして、もう一度掛け直してみると、

「はい、もしもし。先川ですが。」

「もしもし、奈々歌？美佐子だけど」

「あつ、お姉ちゃん。どうしたの？」

「奈々歌、わたし実はね……………」

実の妹に直接こうして声で打ち明けるのは、とても気まずかったが、しかしそれでも、もう心身共にボロボロになりかけている状況からすれば話さない訳にはいかなかった。彼女はこれまでに夫との間に起こった顛末を、時折、思わず泣き崩れながらも妹に伝えていった。妹の奈々歌は、その酷薄に打ちのめされた姉の事の始終を聞いて大変驚いた様子で、深憂な面持ちになって耳を傾けていた。

「お姉ちゃん、これ以上無理して一緒にいる事ないわ。よかったらあたしの家の部屋開いているからもうこっちに移ってきなよ」

奈々歌は、姉の堪え難く辛い現状を憂慮して、今もまだ一緒に暮らしている気遣いじみた懦夫^{へだふ}な男と一刻も早く離れたほうがいいと勧めた。それは、当然といえば当然だったのかもしれない。むしろ、“ごめんね、あたしにはどうしてあげられることもできない”と弱気な言を洩らしてしまう事のほうが不憫で仕方ないと二歳下の彼女には思えたからである。

DATA 4 決別

運よく妹は郊外の3DKのマンションに一人で住んでいたの、姉と子供が移ってきてても問題はなかった。美佐子はその妹の温かい声に受話器を力無く握りしめながら、“ごめんね、ごめんね”と、歳近き彼女に詫びるように声を震わせた。そんな、悲愴にうちひしがれた姉のか弱き喋りを、携帯電話をぎゅっと掌てのひらに汗まで滲ませながら、妹の奈々歌はじつと耳を澄ませていた。悩乱状態に陥っていた姉は、受話器を元に戻し、幾分安堵感の雑じった吐息を洩らすと、直ちに子供と共に離れるべき時が来たのだと自身でも悟ったのであった。美佐子は急いで家に戻り、狂乱じみた男が夜遅く戻って来ないうちに、急いで妹の家まで持つていくべき、必要な荷物だけをバッグにまとめ始めた。もうこれで苦しみは最後なんだと思つて、全神経を脱出する事に傾注させたせいか、一時間もかからずにそれを終える事ができた。幼い娘にも、今日から違う優しい女の人の家に行くんだよと告げた。あとはあの人が帰って来ないうちに、子供と一緒にもう一刻も早く此処を出て妹の家に向かえばいいだけであった。

《矩史、さようなら》

そう一言だけ食卓にメモ書きを残すと、子供と一緒に美佐子は玄関に向かった。ちょうどその時だった。

“チャツチャチャーチャララン”

何か虫の知らせを思わせるような電話のコール音になった。一瞬玄関を出る前に立ち止まったが、彼女はその鳴り続けるメロディ音を無視し慌てて外へ出ていった。

「さあ、萌々香。はぐれないでね。とりあえずコンビニに寄って
いこうか」

近くのコンビニに寄って腹ごしらえのパンやおにぎりを買い、すぐそこからタクシーに乗って駅まで向かう事にした。

(大丈夫。この時間は絶対に会わないから)

美佐子には自信があった。ここ一、二年は事有る毎に痛憤に奔りだす男とも、恋愛していた時期から長年一緒に暮らしてきた仲なのだから。そう、昔は、ずっと前は……と、矩史との思い出の詰まったあの頃が蘇ってくると、急になぜかマイホームへ引き返したい気持ちに駆られてくる。

「ママ。ねえ、なんで歩かないの」

と、頬に臙脂色した痣が所々にまだ残って消えないでいる娘の痛々しい顔を見ると、その遠い昔の甘い過去は一気に消えうせた。

「あつ、ごめん。行こうか、萌々香」

我に返って、そう幼い娘に言っていると、彼女は再び凜とした表情で歩きだした。

(もう後ろには戻れないんだ……いや、もう戻りたくない……)

なぜか自分でもわからぬ、後ろめたく冷たいものが心裏の奥にひんやりとこびりついていた。

コンビニで軽く買い物を買って済ませ、早速タクシーを呼んだ美佐子は、本を立ち読んでいるふりをしていた。娘はその傍で座ったり適当に本を掻き回したりしてはしゃいでいた。十分くらいすると、ハイヤーが駐車場に入って来たのが見えたので二人は店内から出て素早く乗った。駅までは二十分くらいであった。そして、駅に着くと、新幹線に乗るため、急いで切符売場へ向かった。既に陽は西に大きく、長い放射状の光の束を街のそこらじゅうに放って輝いていた。

(このままいけば夜七時くらいには、妹のマンションに着くことができるわ)

まだ発車していない自由席の座席にゆったりとひとまず腰を落ち着けられると、わずかではあるが安堵感も胸に浸ってきたような気がした。妹が住んでいるところは都内に近いS市にあった。彼女達が乗ってから二十分して新幹線は動き出し、約一時間半後にS市のO駅に到着した。それからすぐに、今度は奈々歌の住んでいるマンションの近くまでバスに乗り換えていった。

“ピンポーン”

「奈々歌。私だけだ」

夕方を過ぎ、すでに街は宵の闇に包まれていた六時五十分。美佐子とその娘は、なんとかマンションまで辿り着き、やや臆した表情と震える指先で妹がいる部屋のインターホンを押した。爽やかな十月の夜の空気は、すでに冬を思わせるように涼しさを通り越して冷たさが肌の至る処に感じられた。辺り一帯は街の灯がしめやかにまばゆく輝いていた。

「はい。あつ、お姉ちゃん」

インターホンの奥で妹の柔らかい声がした。そして、軽く“ガチャッ”と錠を外す音が聞こえた。数年ぶりに再会した姉妹は、その歩んできた境遇は違えども、どこか自然と気を遣わずに言葉を交わせる余裕があった。妹の奈々歌は、二人が今日自分のマンションに移ってくる事を知っていたので、彼らの分まで夕食を作ってくれていた。美佐子と幼い娘の萌々香は、彼女にお礼を言ってそれらを美味しそうに全部食べていった。それからまた、溜まりに溜まったストレスや疲れを癒すため、ハーブの入浴剤を万遍なく使った広く綺麗なバスルームで、久しぶりにゆったりとした空間を満喫した。既に時計の針は十時を指そうとしていた。妹にも勧められ、今日は+疲れたであろうから彼女は早めに身体を休める事にした。

「今頃びっくりしてるよね。あの人」

奈々歌が自分らのために用意してくれた寝室の小洒落たベッドで仰向けになりながら、美佐子は夫の事を早くも秋思していた。ギャブルにまみれたあの酔漢は、私が突然メモ書きだけ残してずべ公のようにいなくなったことに憤慨して、またグラスを叩きつけたりしているのだろうか。誰もいない居間で一人何か奇声を喚おめいて、天井に向かって見えない私に泣訴でもしているのだろうか。そんなふうに暫くのあいだ、夫が今どんな心境で今日の夜を過ごしているのか、女は暗闇の天井をじっと見つめたまま、恐怖と些かの好奇心を胸裏で巡らせていた。泥酔して発狂してしまうのは、私が今日のよ

うに逃げ出したりすることが悪いのでは、とさえ思ってしまう。あれこれ様々な憂慮が脳裏を通り過ぎ、眠りに落ちたのは結局深夜二時を過ぎてからであった。翌朝、いつもと同じく八時過ぎにベッドから起き上がった。頭は怠さが残っていたものの、身体のほうは若干軽やかに感じられた。洗顔した後、玄関へ目を遣ると何やらメモ書きが残してあった。奈々歌はすでに仕事に出掛けていったみたいでいなかった。妹は某食品会社の社長秘書をしているのだ。美佐子は幼い子供と一緒に留守番をしていた。居候のように突然移ってきて、あちこち周りをぶらつく訳にもいかなかった。夜七半過ぎ、妹がようやく帰ってきた。彼女がいうには、ずっと部屋にいても退屈だろうし、なんなら近くの公園やコンビニくらいなら足を向けてくればいい、という事であった。翌日は妹の広いリビングのまったりとした空間が心地良かったせいか、ずっと部屋にこもっていたが、翌々日に姉と娘の萌々香は、近所の公園へ退屈を紛らす意味も込めて、一緒に歩いて行った。その日は穏やかな秋空に、爽やかな風が二人の頬をかすめていった。午前十時くらいであったが、すでに二組の子供連れの主婦が静かに戯れていた。美佐子は軽く挨拶をしてベンチに座り、子供は嬉しそうに砂場のほうへ駆けていき、他の幼い子供達と人懐っこそうにして群れに加わっていった。ゆつたりと自分はひとりだけ、さびれた侘しいベンチに腰掛けながら、彼女は娘の順調に成長している様子を頼もしげに柔らかく見つめた。近くには自分と年齢にさほど大差はない若いマダム的微笑んでいる表情も見える。その楽しそうな、何も悩み事などないような雰囲気の中で、まるで自分だけが禍事の渦中に取り残されているような気さえた。二時間ほどして、二人はまた妹のマンションへ戻り、昼ご飯を食べた後、リビングで何もする事なくただだとテレビを見ながら過ごしていた。こんな退屈な味気ない日々が一週間ほど続いた。はじめのうち、主婦としての苦悶生活から解放されたという事で、リラックスもできたが、次第に少しずつ無気力な感じにもなってきた。夜も最初の二、三日は眠りに就く事ができたが、それを過ぎる

と深夜に数回目が醒めるなどして十分な睡眠が取れない日も次第に多くなってきた。日を重ねる毎に蒼白く冴えない表情を浮かべる姉の様子を窺うと、妹は自然と憂色を表し、もしかしたら“うつ”になっってしまったのではないかと思うようになった。精神的に不安定な状態も続き、DVDで色々な映画を観て気を紛らわそうとしても、何故か一向に興味が湧かず、途中で巻き戻しするばかりであった。他にも、パソコンを使ってネット弄りなどしてみたが関心が湧かず、リビングのソファに身体を放り投げて、ただポカんと壁に疲れたような視線を向けたまま終日を過ごす時間も多くなってきた。睡眠時間もまともが取れない日も多くなり、すぐに眠ることができたとしても、悪夢を見る回数が多くなってきた。生活自体も不規則な状態に様変わりし、このままでは姉も廃人になってしまうと心配した妹は薬局に出向いて、うつ状態に効果が有りそうな薬を買ってきてくれた。美佐子はすぐにそれを飲み始め、次第にそれが効いたかのように、少しずつではあるが、精神的に落ち着いた感じを保てるようになってきた。がしかし、それは二カ月過ぎると効き目が薄れてきて、またメンタル面で落ち込んでしまった。また別の薬をと思つて今度は自身が薬局に足を運んで、薬剤師に聞いて良さそうな物を何種類か買ってきた。そして今回のも初めのうちは睡眠も長時間取れ、精神面も少しずつ物事に興味が湧いてくるなど回復が見られしたが、二カ月近くになると、また元のうつ状態が現れてきてしまった。もう市販の薬では効かないと、憔悴した表情で困り果てていた時に偶然新聞の中で見つけたのが、“あなたの疲れた心癒します”とのキャッチコピーを謳った『心療内科 播野医院』の広告であった。美佐子は溺れる者が藁をも掴む思いで、三月の上旬に早速予約して足を運んだ。同月の第二週に初診を受け、今回訪れたのは二回目であった。

DATA5 よみがえる悪夢

そして今日

（そうか、まだフラッシュバックが続くのか。まあこれだけの期間、虐待や強姦という強烈な行為が繰り返されてきたわけだから無理もないな）

「意識して男性から眼を背ける事はありませんか」

播野は自身も男性である事を尋ねる前に自覚した上で、かなり丁重な腰の低い物言いで患者に尋ねてみた。

「ええ、やはりあります。酷い時にはテレビの中で男性が出て来るだけでも、顔を手で覆い隠してしまい、吐き気が催してくる事さえあるんです」

「なるほど。日常生活で外出する時でも堪えられない感じですか」

「そうですね。たまに近くに外出して、青年の男性と擦れ違っただけでも顔をつい逸らして避けて通ってしまいますね、もう最近では」

「そうですね。お辛い体験をされましたからね。まあ、仕方のない事でしょう」

（うむ、PTSDは厄介だな。本人が酷いショックを受けているだけになんとかして早く回復させてあげたいところだが…）

「あの、先生。私、やっぱりPTSDっていう病気になってしまったんでしょか」

美佐子は前々からこの症状の事が気になって仕方なかったのので、つい自ら医師に訊いてしまった。

「あつ、ええ。まあ、あなたがこれまで話してくれた経緯やそれから起こった一連の病状から察しますと、やはりそのPTSDというのが一番該当しますよねえ」

『PTSD』とは心的外傷後ストレス障害の英略で、心に加えられた衝撃的な傷が元となって様々なストレス障害を引き起こす精神

疾患のことである。心の傷とは、心的外傷又はトラウマを指す。トラウマには、事故・災害時の急性トラウマと、虐待など繰り返し加害される慢性の心理的外傷の二種類がある。先川美佐子のケースでは、典型的な後者のトラウマのほうである。

播野は、暫しの間また、品行方正な優等生が机に向かって黙々と勉強するように、パソコンのキーボードを規則正しくカタカタと鳴らして、前回初めて来た時から今日までの症状の経過を文字にして打ち込んでいった。

（精神不安が続くまだまだ続くのは仕方ないか…中途覚醒や悪夢などの不眠症状をなくしていく事をまず先決に考えるところか）

「先日お薬としてお出ししました、睡眠剤のほうはきちんと飲んでいていますか」 「ええ。每晚寝る前にきちんと飲んでおります」

「睡眠のほうはどうですか」

「そうですね。飲まなかった時と比べたら、深夜途中に起きる事はほとんどなくなりましたね。思ったよりぐっすり眠れてる感じがす」

「なるほど」

（ベンザリンとサイレースは効いているな。やはり中時間作用型以上が妥当か。今回は一種類だけ長時間のやつに変えてもいいだろう）

患者は、落ち着き払った様子でパソコンに向かいながら、自分に対する適切な治療法を探しているであろうこの紳士的な雰囲気のある医師に、信頼の眼差しを注いでいた。この先生なら杖柱と頼んでもいいという一途な想いにも駆られた。

（精神科ってもっと荒く気違いじみた先生ってイメージあったけど、なんか全然違ったわ。よかった…）

と自分が勝手に逞しゅうしていた淡い想像が吹っ飛んで、もしかしたら早く治してくれるかも、という期待感を含んで胸を撫で下ろしていた時、

「フラッシュバックはどんな時に今でも起こりますか」と医師は、彼女に症状に対する質問を続けた。

「眠っている時ですね。夜昼問わず」

「鮮明に過去に受けた出来事が思い出されるのですか」

「え、ええ。そうですね。夢の中でも、なんか現実にも夫から暴行を受けているような気がしてならないんです」

「なるほど」

『フラッシュバック』という専門用語は、過去に起こった記憶のなかで、その記憶がふと無意識に思い出され、なおかつそれが今まさに現実起きてきているかのような感覚が極端に激しい状態の時ににおいて使われるのである。このクライアントの上記の発言から察すると、まさにこの『フラッシュバック』現象があてはまる事になる。

「そのリアリティを伴った悪夢の中で、虐待をしている男性の姿や、また、あなたが床に張り飛ばされたとして、その時にバンとか音も聞こえるような感じですか」

「い、いえ…さすがにそこまでは……していません」

「それでも、襲われているという強い感覚は生じるんですよね？」

「ええ、そうなんです。それが怖くて堪らないんです」

このPTSDや急性ストレス障害の患者に顕著な『フラッシュバック』は、必ずしも映像や音がその中に含まれるとは限らないのである。記憶には多様な要素があり、『フラッシュバック』は、先の患者も医師に対して示したように、“恐怖”などといったいわゆる感情や味覚、痛覚などの“感覚の衝撃”として発生し得るのである。

「なるほど。まあ、大変なご経験をされましたからね。ほかに日常生活においてパニックに陥る経験はありますか」

「パニック…ですか」

女は、質問の内容がよく理解出来なかったのか、漠然とした、最初から白く顔の塗つてある人形のような顔つきで訊き返した。

「ええ。突然、何の前触れもなく、強い不安に襲われるって事はないでしょうか」

「あつ…そうですね。ええと最近はこちらに…一ヶ月…くらい前と、とかはもう外出…する事さえ嫌になるくらい…でしたので…していませんでしたが、それ以前は…街中の…シヨッピングモールに…出掛けて行った時に…何回か、クラクラツときて、…吐き気もしてきて…それから」

「なるほど。わかりました、もう結構ですよ」

播野は、患者が半睡状態のようにいながら、表情に現れないまでも辛苦の経験をした雰囲気がありありと伝わってきたので、女が全て語り終わらないうちに言葉を途中で遮った。

（かなり感情が麻痺しているな。よほど酸鼻といつても過言ではない体験を強いられたんだろう）

「あ、あの先生。もう退室してもいいでしょうか」

女患者は、ほぼ眼の前にいる“男性の”医師と対面して、なおかつ、診察室という狭い空間にいる事に耐え難くなってきたのか、左手で口元を押さえながら、医師に早く診察を済ませてくれるようか弱い声で促した。

「あつ、はい。もう終わりますよ」

（未だ今日来て二回目だし、体験が凄まじかっただけに回復がなかなか進まないのはしょうがないだろう。薬は、今回も抗不安剤としてエチゾラム系のデパスとエチカームを引き続き出すとして、睡眠導入剤のほうは前回と同じベンザリンの他に、今回はサイレースに代えて長時間作用型のソメリンを出す事にしてみよう。安眠の間は徐々に長くなっていくだろう）

「はい。お待たせしました。お薬のほうなんですけど、前回と同じく、抗不安剤と睡眠導入剤のほう、それぞれ二種類ずつ出しておきますね。ただし、今回は眠剤のほう、一種類だけ違うものに替えて

また少し様子を見ましよう」

「…わ、わかりました」

「それから、次此処来た時には今度ナラティブセラピーという精神療法を行っていきましよう」

「ナラティブ…セラピー？…ですか」

「ええ。あなたの病状の場合は薬物療法のほかにも積極的に治療を進めていく必要があるんですよ」

「そ、そうなんですか。…わ、わかりました」

「最初のうちはゆっくりとやっていきますから、御心配なさらなくても結構ですよ」

「…は、はい」

と、それでも彼女は多少不安を覚えたように答えた。患者は相変わらず病的なポーカークフェイスをしていて感情が鈍っている様子であったが、この医師に信頼をおいているのか、その見つめるような眼差しの奥はどこかちょっとだけ煌々きらきらめいていた。

「はい。それでは、次回の日にちなんですが、また一週間ほど明けて三月二十七日の十時くらいはいかがですか」

「え、ええ。それで 予約お願いしたい と思います」

「はい。では次回三月二十七日の十時でお待ちしております」

「ど、どうもありがとうございます」 三十前後の未だ若い女は、丁寧すぎるくらい深々と頭を下げて、診察室を静かに後にしていった。

（まっ、彼女のほうは早く治してあげたいな）

播野はまた、パソコンのキーボードを規則正しくカタカタと鳴らしながら、今日の診察の内容や今後の治療の大まかな流れを詳しくファイルに打ち込んでいった。久々に、我がクライエント達を回復の道へと教諭す事が出来る医師としての矜持に燃えたのか、彼は入力している最中に一度、軽く両手を握りしめ小さくガッツポーズを作った。

（よしっ、なんとかなるさ。次行こう） と、珍しく漲る気持ち

が全身に溢れ出してきた時、

“ トントン ” 「失礼します。先生、今日午後一に予約っていた尾川さんなんですが、体調悪いからキャンセルしたいって電話がありました」

と、長身の女で受付を務める野尻が幾分申し訳なさそうな表情へかおゝして、言づけを伝えるに診察室を覗いた。

「尾川さんね。 あゝ、例の対人恐怖症のおじさんだね。 わ

かった、もう電話は向こう切っちゃったの」

「え？…あー、はい」

「そう。今度からはなるべく、その手の電話が来たら私に先に報告してから対応しなさい。前に言ったかもしれないけれど、ここ最近どたキャン多いからね」

と、播野は、いつもであれば不機嫌に無表情な面へかおゝを歪ませ、冷たい態度を取ってしまうところであったが、今は心中に温かいものが支配しているおかげで感情的にならず注意する事ができた。

「はい、わかりました。すみません」

受付の野尻は、頬の肉付きはふっくらとしているが、相変わらずどこか血色の良くない蒼白な表情へかおゝに引き攣ったような笑いをつゆ作り、そそくさと軽く頭を下げて、また自分が担当している受付へと戻っていった。

（さて、次いくとしよう。次 は、あー、人と話をするのに圧迫を感じるっていう人ね…）

DATA 6 消えぬ葛藤

「はい、診察札三番の方どうぞ」

「失礼します」

現れたのは、でっぷりとしていて、不精髭を顎の周りに雑草のように生やした三十代後半の男であった。彼は何も言わずに、そのまゝ丸い回転椅子にドスンとその鈍重そうな腰を下ろした。それから、「よ、よろしく願います」

と一言吃るような低く小さい声で挨拶をすると、普段の性癖からか、幾分曇らせた眼鏡を左手で軽くずりあげると、すぐに下に視線を下ろしてしまった。眼鏡越しにその意志の弱そうな両眼は、一度風が吹けば消えゆく燭火ともしびのようでもあった。

（まるで“うどの大木”だな…）

と、播野は、ずんぐりした患者を一目見遣り、心頭で侮蔑した。

「はい、栗谷さんですね。あれから体調のほうは如何ですか」

「……そ、そうですね。まだ人を見ると顔が赤くなってしまいませんか」

と、まるまる肥ふふとった患者は、医師の表情へかおをまともに見ないで、吃るようなぼそぼそとした声で話し出した。

この栗谷という肥った男、今は無職であるが、三ヶ月前まではなんと営業の仕事をしていたらしい。語り口やその時の声の大きさは、とてもじゃないが新規開拓などで外をあちこち飛び廻っていたとは想像がつかないほどであった。

「まだ人見知りをする……なるほど」

播野は、患者の初診からの症状の経過を見ながら、握りこぶしを作ったまま頬杖をついて暫し考え込んだ。

（うゝむ。患者の努力不足かな。薬ちゃんと飲んでるんだろうか。それか、やっぱり…）

「お薬はきちんと飲まれていますか」

「あ…たまに忘れたり……」

男は相変わらず視線を下に落としていて指を軽く弄びながら、不明瞭な返答をした。

「は、薬を飲まない事もある」

と、播野は些かわざと強い口調で、患者の話した事実を確認して言った。

（今回薬はコレミナルとデパスだったっけ。共に脳神経にすぐ作用するから、それなりに効き目を感じるはずだが…）

「飲まないと治りませんよ」

彼はまた、ずばらで規律を守らなそうな患者に言い聞かせるため、きつい調子で言を発した。

「は、はい。すみません」

肥った男は俯いたまま手短にそう答えると、穢らしい不精髭をわけもなく右手で弄りまわし始めた。

（まったく…こいつ、真剣に治す気あるのかどうかも疑問だな）

播野は、でっぷりとした患者を冷ややかにまた一瞥して、呆れてしまったのか思わず表情を不機嫌そうに顰へしかゝめた。男は、ただただ視線を床に遣っていたが、

「あの、コレミナルってなんですか」と、突然丸くでかい顔を大きく後ろに反らすように上げ、医師に薬の名前を聞き出した。

「はい？」

と、播野は患者の意表を衝いたような質問に驚いたが、

「いや、コレミナルって何のお薬のかなと思ひまして…ちょっと気になっただけです」

自称対人恐怖症の男は、目が游いだり、手足を震わしたりして、恐怖を感じているような様相を呈したが、それまでの吃り口調から一変して早口で、医師に尋ねた。

（この男、本当に社会恐怖なのだろうか。たしかに、これほどまでに人の顔を見れないなんていうのはおかしいかもしれないが、でも、何となくこいつから漂ってくる雰囲気はホンモノじゃないのを

感じてしまう)」

播野は、眼の前にいる患者と対面して話や仕草などを窺ううちに、初めから見透いた態度で自分の診察を受けに来ているのではないか、という患者自身に対しての訝しさと煩わしさの入り雑じった思いが少しずつ募ってきたのであった。

「コレミナルもデパスも精神的な不安定を緩和させてゆく『抗不安剤』ってやつです。飲んでからすぐに効くというわけではなく、最低でも一週間以上飲み続ける事が肝心なんです。きちんと毎日、決められた回数飲まないと治りませんよ」

「ちなみに、副作用とかあるんですか」

男は気になって仕方がなかったのか、幾分赤面した表情へかおで額に汗を数滴滲ませながら、少し間を置いて又質問した。

「副作用…ですか。まあそうですね、たまに眠気が襲ってきたり、頭痛が起きてしまうことがありますか、それほどご心配……」

「わ、わかりました。も、もういいです」

と、再び内に籠もるような吃りに近い声で自信なく、肥った男は軽く左手を前に気弱そうに翳して途中で話してくれている医師の言葉を遮った。

「大丈夫ですか。それでは次回まで一ヶ月ほど期間を明けましょうか。え〜と、ちょっと待ってくださいね……」

(薬は前回と同じで、抗不安剤はベンゾジアゼピン系のデパスとコレミナル、睡眠導入剤のほうは、短・中時間作用型のリスミーと中時間作用型のエリミンでいいだろう)

播野は少しの間、画面を注視しながらパソコンのキーボードを力タカタと鳴らしていたが、ふと気付くと、彼の額にも汗が滲んでくるのがわかった。

(……なんて事はないさ。いつもの事じゃないか……)

「はい、お待たせしました。お薬は前回と同じもの出しておきますね。次回の日にちなんですが、四月二十一日の十一時は如何ですか」

「え〜つと、あつ、すいません。できれば三時半のほうが都合いいんですけど……」

男は、左手で無精髭をいじくり回しながら、ぼそぼそと不明瞭な声で診察に訪れたい時間を伝えた。

「二十一日の三時半ですね、わかりました。大丈夫ですよ。それでは、次回、四月二十一日の午後三時半でお待ちしております」

「あ、ありがとうございます」

そう一言、相手の顔も見ずに破棄なく挨拶をすると、こそこそと逃げ出すように、ずんぐりした体を頼りなく丸めて診察室を後にしていった。

（なんなんだ、あいつは。ただの無気力なニートだろ、ありや……）
男が出ていった後、播野は何となく気怠そうに、白髪雑じりの品の良さそうに整えた髪を軽く掻きむしりながら欠伸〜あくび〜をした。

エチゾラム（商品名：デパス）

…チエノジアゼピン系。睡眠薬として出される場合も有り。

【副作用】？ 精神神経系副作用として、ときに眠気、ふらつき、眩暈〜めまい〜、歩行失調、頭痛、言語障害有り。

？ 依存性大量連用により、まれに薬物依存を生じることあり

？ 連用中における減少又は中止により、振戦、不眠、不安、幻覚、妄想等の禁断症状有り

播野は、デパス・副作用・欄の“依存性”という文字を鋭く氷のように冷ややか眼で凝視した。

（これまででいったいどれだけ多くの人間が、この一粒に縋ってきたのだろうか……）

（それからいったいどれくらいの人々が……）

播野は、机の引き出しに片手を入れ撫でるようにして探り始め、数粒の錠剤をその中から取り出した。そして、憂愁に駆られたよう

な物淋しい眼で、その無機質な白い一粒をじつと眺め入った。

（こんなに小さな物質が簡単に人間の脳に影響を与え、情緒の不安を抑え、そして又その代わりに……………）

彼は、医師として精神医学に関わり長い月日をともししているが、薬物の即効性やそれから生じる恐怖というものに改めて驚愕せざるを得なかった。

（若かりし頃は、日常生活において何か悪いものにも取り憑かれていたように、実体なき無形な“心”の領域に病んで苦しんでいる人達をただひたすら救いたいという、正義感に溢れていたものだが、……………今は……………）

播野は傍にある時計の、一定間隔で刻み続ける秒針をちらりと見て、大きく溜め息を吐いた。

（もつとも、今自分が医師としてこうして生き延びているのは、抗不安剤や向精神薬などを毎日クライエントに処方しているからでもあるが……………）

「先生、失礼します」

肩を落として些かうつむき加減で、魂が抜けたように、また例の深い物思いに沈みかけていた時、ノックと同時に慌ただしい女の声が扉越しに聞こえた。さきほどの診察の前に、患者のキャンセルを報告しに来た受付の野尻であった。

「…なんだ、またか？」

「ええ。“うつ”がなかなか治らないっていう山口さんなんですけど、なんでも今朝起きたら高熱でとても外出できる状況じゃないって言ってます」

「しょうがないな、まったく…」

回転椅子を身体と共に野尻のほうに向け、机のうえに片方の肘を偉ぶったように突いていた播野は、億劫そうにそこから立ち上がり、電話機のある受付へと向かった。

「もしもし、山口さんですか。今日は来られないという事ですが……………なるほど、わかりました。次回からはもうなるべく予約

のドタキャンは止めてくださいね……はい。それでは、お大事に」
播野は、手に持って会話をしていた受話器を無造作にガチャンと音を立てて電話機に置くと、受付の野尻に、また引き続き頼んだぞとでも言い聞かせるようにしかと目配せをして、自分は診察室へと戻っていった。

（まったく。目の前は待合室で患者がいるっていうのに、キャンセル電話なんかにいちいち対応したら私の面子が保てなくなってしまうよ）

（……さて、気を取り直して次いくとするか）

播野は、額に滲んできた汗を白い綿のハンカチで丁寧に素早くささっと押さえ付けた。

DATA7 アルコールという名の悪魔

「番号札四番の方、診察室へどうぞ」

「失礼いたします」

と、老父と老女の声がほぼ同時に入り雑じって聞こえてきた。

年老いた男は作業衣のようなカーキ色の暑いアクリルの長袖に、紺色のキャップを気取って横に被っていた。そして、老翁が先に播野の前で軽く会釈をすると、

「先生、お願いいたします」

付き添いらしき妻のほうが、膝に両手を添え、敬礼のように頭を深々と下げて丁寧に挨拶をしてきた。

（今日初めての初診だな。それにしても、また凶々しく勝手に椅子に座り込みやがったな）

「はい。今日はどうされました？」

播野は、最前列で授業を受けるクラスの優等生のように、腰掛けしている椅子に対して背筋を真っ直ぐに伸ばし、紳士的に温雅な物言いで、最初の一言を発した。

「……………」

「ええ。実はこの人アルコールにやられてしまいました。昨年九月に会社を定年しましてから、不幸な事にずっと酒びたりの生活を送ってしまった……飲む量が増えてゆくうちに次第に飲まなければ死ぬ死ぬと言いつつまでになってしまった……」

付き添いの妻は、まるで自分事のように、溺れた者が藁にも縋るような切羽詰まった面持ちで、彼に代わって事情を打ち明けた。医師もそれとなく直感で、眼の前で影を薄くしている老父から漂う苦衷は感じたかもしれない。

「なるほど。アルコールに依存してしまわれたわけですね」

「主人をどうかして助けてください。先生、お願いします」

年老いた妻は、両手を胸の前で祈るように組み合わせながら涙声

で医師に助けを求め、苦しそうに目を閉じてほんの少しまた頭を下げた。

「奥さん、そんな心配なさらなくても大丈夫ですよ。根気よく治療のほう続けていけば回復していきますから」

「本当に先生、駄目な主人なんですけど、助けてやってください」

茶色いパーマ頭に所々グリーンの染色を施している歳老いた妻は、再度両手を眼の前で組んで、神仏に祈るようにお願ひした。

（典型的なアルコール依存だな。男のほうはうつ症状にもなっていると見える）（……根気よく通院すれば治るといってもないんだよな……）

（根本的な治療法といえるものは現在「いま」のところ断酒しかないというのが実情だ。まあ、一応シアナマイドとノックビンという二種類の、少量の飲酒で悪酔いを惹起する薬はあるが……）

アルコール依存症とは、薬物依存症の一種で、主に飲酒などのアルコールの摂取によって得られる精神的、肉体的な薬理作用に強く囚われてしまい、自らの意思で飲酒をコントロールできなくなり、強迫的に飲酒行為を繰り返す精神疾患である。

「なぜ、飲酒のほうに奔^へはし^はられてしまったのですか」

「……あ、あー…ええと」

「いいわよ。あんたは黙ってて」

当の本人がやっところさ医師に対して言葉を発しようとしたが、妻は、顔をずっと冴えなくしている亭主を見て非常に頼りないと思つたのか、彼が伝えようとする間際すぐそれを制した。

「実はですね、先生。この人日頃から趣味とか何にもなくて。定年してから始めのうちは、朝起きるのが遅くなって昼間もぼけーと新聞読んだり後はテレビを漫然と見ているだけになりました。お酒もちょうど会社辞めてからは唯一の愉しみみたいにくびぐびと飲み始めましてね。する事が何にもないからと言って晩から次第に夜更けまで一人で酔っ払うようになってちやっただんですよ、ホント情けない事に……」

「なるほど……」

（特にこれと違って、興味を持っているものもないのか、もうすぐ高齢者の部類に入るというのに。うつ病にはなりやすいタイプだな…）

「まあとにかく、長時間の飲酒は身体にもよくありませんからね。気をつけましょう」

「この人先生、肝硬変にまでなってしまったんですよ。飲むな飲むなといっつも声かけてるんですけど、全然人の話聞かなくて困ってるんですよ」

妻はまた、何事においても意気地のなさそうな老夫を尻目にかけて、日頃の愚痴を頼りやすい医師に醜い皺を表情へかおこいっばいに作りながらぶちまけた。

「肝硬変に……ですか。そちら病院には行かれたのですか」

播野は、患者の付き添いの妻とは正反対に、落ち着き払って相変わらずのポーカーフェイスと温柔的な口調で対応していた。

「ええ、そうなんです。二ヶ月ほど前に病院へ行っただんですけど、同じ事言われましたね。やはり飲み過ぎは良くないよと。まったく、ここ最近ではアルコールで酔ってないと、苦しくて苦しくて仕方がないって泣き叫ぶ事もあって。こちらとしても大変困り果てまして……」

「なるほど。典型的なアルコール依存ですね。自身の心の中で“もうこれ以上飲んだらいけない”というセーブが出来なくなってしまうんですよ」

「へええ、そうなんですか？じゃあ、私のほうでいくら“あなたもう飲むのは止めなさいと”説得してもどうしようもないって事なんですか、先生」

夫と共に歳いった妻は、そのような理屈を聞かされたのは初めてらしく、思わず左手で口の辺りを覆って、医師に驚きの表情を見せた。

「ええ、そうなんです。ここが非常に厄介なところなんですよ。」

患者である旦那さんはおそらく今、アルコールに酔った状態でいないと精神的に塞ぎ込んでしまっているでしょう。これは大量の飲酒が精神的にも大きなダメージを与えてしまったという証拠にもなるんですよ」

「まあ…それじゃやっぱり主人は取り返しがつかないくらい飲み過ぎてしまったって事になるんですね」

老妻は、見過ごしてきてしまったと自ら思える過ちをぎゅっと掌を握りしめながら悔やんだ。改めて冷静な医師のコトバを聞くと、表情へかおやはおのずと蒼ざめてきて、失望の色を隠さずにはいられなかった。

アルコール依存に陥ってしまった人達も、何とかして適量のアルコールで済ませておこうとか、あるいは今日は飲まずにいようかと考えていることが多い。そして過剰な飲酒が及ぼす様々な弊害を知っているにもかかわらず、いったん飲み始めると自分の意志では止める事が出来ず酩酊するまで飲んでしまうのである。このようなブレイキが効かない飲酒状態を『強迫的飲酒』というのである。

「ご主人はここ最近日中も飲酒していらっしゃるんですか」

相変わらず播野は、患者達のほうを向かずにキーボードを打ち鳴らし、ロボットのようにはパソコンに眼を見遣ったまま、症状にかかわる日頃の病癖について尋ねた。

「そうなんですよ。もう困り果ててしまいました、それでやっと今日こちらに参ったわけなんですけれど」

「なるほど。終日飲酒癖が抜けなくなってしまったというわけですね」

播野は、首をちよいとだけ縦に動かして頷き、それは大問題である事を二人に知らせるように大袈裟に腕組みをした。……と、その時、

「うるせえーんだよ！この野郎」

診察室に入ってからずっと、口のきけない人形のように黙り込んでいた亭主が、突然、声を張り上げて怒りを露へあらわにした。

「あんた、ここは先生の言う事ちゃんと聞かなくちゃ本当に治らなくなっちゃうよ」

「だからさあ。酒ちよつとばかし飲んで何が悪いんだよオ！」
煙草を吸うのを止めた際に起こる禁断症状と同じく、アルコールに少しでも浸ってないと精神的におかしくなっているのか、泥酔した時と同じく呂律が回らないような銅鑼ほどら声で、男は妻の諫めに鋭く反発した。

「ちよつとばかしじゃないでしょ、あんた。ここ最近はずっと昼間も顔真っ赤にしてベロベロしてるだけじゃない」

「うるせえな、何が悪いんだよ」

「まあまあ、二人とも落ち着いてください」

播野は、このままだと眼の前で二人が浅ましい口喧嘩を繰り広げてしまうと思い、直ぐさま後ろを振り返って、左手で軽く制した。

（ここで諍ひいさかゝいなんか起こされちゃ困るよ、まったく…

……）

……しばらくのあいだ彼は、これまでの『アルコール依存』患者における事例のファイルを蠅螂かまきりゝのようにするどい眼で凝視しながら黙り込んでいた。

（うゝむ。一度アル中になってしまつとどの患者もほとんど、いや全てと言つていいほど再発してしまつている。抗酒薬をこちらが処方しても、みな、“ついひとくちだけ”に負けてしまつんだよね…）

上手にお酒と付き合う事のできる機会的飲酒者とは違い、自分の意志では止まらなくなつて酩酊するまで飲み続けてしまつところがアルコール依存症の第一の難点である。

（これまで自分が診てきたクライエントのうち、回復したのはたったの二人だけ…。再びお猪口に手を出した者は自殺してしまつたケースもある。

（うゝむ………）

播野は、解れかかった腕をまた深く組み直し、困つたぞと云わん

ばかりに首を右のほうへ傾げた。

統計的に見て、ほぼ毎日純アルコール量で一五 ミリリットルハ日本酒で約五合半、ビール大瓶で約六本、ウイスキーではダブルで約六杯以上飲む習慣のある者を『大量飲酒者』と呼んでいる。ただし、これら大量飲酒者に該当しないアルコール依存症者もいるので、一概に大酒飲みばかりが自らの意志をコントロール出来なくなってしまうという事ではないのである。

「ふだんですが、一日にどれくらいの量のお酒を飲まれているのですか」

「……………」

「あつ、すみません。ええとですねえ、ビールで瓶四本以上、日本酒で五合くらい飲んでいらつしゃいますか？」

医師は、飲ん兵衛の患者である老父に尋ねたが、反応がなかった。ので、代わりにまた、傍にいる同い歳くらいの妻が通訳のように、些か慌てた素振りを見せてから代辯へだいべんした。

「ビール三瓶に、日本酒は四合ですか。それなりに飲んでしまつてますねえ。まあ、ぎりぎり大量飲酒とまではいきませんが」

どうしても、『脅迫的飲酒』が進んでくると、日常的にアルコールに酔っている状態、又は体内にアルコールがある状態にならないと落ち着かなくなったり、調子が悪いと思うようになって、陽の出ている時間、眼が覚めている間は飲んではならない時（例えば勤務中など）であつても、絶えず“飲酒”を続けるという『連続飲酒発作』が頻繁に行われる事がある。どうやらこの患者も、アルコールに洗脳されてしまったらしい。

「先生、もうどうしたらこの人が酒飲むの止められるようになるんですか」

付き添いの妻は、相変わらず切羽詰まつた調子で医師の冷静そうな顔色を窺った。

「ここまで飲んでいれば、突然止めると私が言つてもご本人は止めることなど到底出来ないでしょう。それよりも今は飲酒する時間

を少しでもなくしていく事のほうが肝心ですね」

さすがの播野も、女の早く早くと逸はやくる心境が自分にも伝わってきているのか、ここにきてついに声高で早口な口調になってしまった。

症状が進行していくと、身体的に限界が来るまで常に『連続飲酒』を続けるようになり、体のほうがアルコールを受けつけなくなるとしばらく断酒して、それがまた回復すると、連続飲酒を続けるという悪循環を繰り返す『山型飲酒サイクル』に移行してしまう事がある。

「ご主人さんに聞きたいのですが、会社を辞められてから、今日ここへ来る約半年までの間に、お酒を集中して飲み続けた期間と逆に途切れてお酒を飲まなかった期間がありますか」

「……………うん、ん？」

「あなた、ちゃんと先生の言ってる事に答えなさいよ」

ひどく困憊しきっているのか、医師の眼の前で暗く冴えない表情「かお」をして腰掛けている夫のほうをちらと見ると、同じく幾多も馬齢の加わった妻は彼に頼りなさを感じずにはいられないようであった。

「うるせえ、わかってーよ。あのな、俺はな、長年汗水垂らして配管工としてやってきたんだい。その反動じゃないけどさ、先生よお。ちつとぐらい酒に浴びたりの生活だつてあつたつておかしくねーじゃーんかよ」

「何言つてんだい、あなた。最近じゃもう四六時中呑ん兵衛じゃないかい。それでこのザマじゃないの。情けないつたらありゃしない」

屁理屈な愚痴をこぼす夫に対して、連れ合いは続けざまに口を五月蠅くするさくして利かん気の強い彼を詰まじった。

「……………で、お酒に入り浸りだった期間とお酒を口にしなかった期間がありましたか」

「なんでそんな事聞くんない」

男は、初め気障へきざっぽく横に傾けていた帽子の鏝へつばををいつの間にか前方に深く表情へかおを隠すようにして被っていたが、いじけたように口の中でただ吃りを繰り返すだけでまともに質問には答えようとしなかった。

「あんだ！ちゃんと本当の事言わなきゃ駄目じゃない。先生ホントにすみません、この人ぐずで。ええ、確かに気が狂ったように目一杯飲んで眠る前に吐いてその場で身体ごと倒れてしまった。なんてことも日常茶飯事のようになってきたいるんで困ってます。体を壁などにぶつけて動けなくなると、さすがにもう酒浸りになんかなるもんかって本人言つてそこその間は全く飲まなくなるんですけど、それでもまた、“喉元過ぎれば熱さを忘れる”っていうんですか懲りずにまた顔赤くしながら一人ニヤニヤして飲ん兵衛になってしまふんですよ、この人」

患者の連れ合いは、さつきよりはわずかに物言いは穏やかになつたが、それでも眉間に皺は寄り続け、夫に対する杞憂の念はずつと表情へかおに現れていた。

「なるほど。やはり周期的なサイクルはありましたか……」

(…だとすると、かなり症状は進んでしまっているな。今アルコールに男は酔つていなくても酔つ払っている時と同じような言動をしているし……『ドライドリンク』ってやつか)

播野は気怠そうに頭をぐるぐる廻し、再び暫しのあいだ腕組みをしながら考え込んだ。飲酒の量が極端に増えると、やがて社会的・経済的問題を引き起こしたり、家族とのトラブルを抱えるようになってしまつたりする。今回の患者の例においても、配偶者との折り合いが良くないので、家族間でのトラブルといえるのかもしれない。自らが原因を作ったこれらのいざこざにより、さらなるストレスを感じたり、激しく後悔の念に駆られたりするものの、その精神的苦痛を和らげようとまたさらに飲酒を繰り返してしまうのである。このように、自分にとってマイナスな面が強く働いているにもかかわらず、アルコールを摂取し続ける飲酒行動を『負の強化への抵抗』

と呼ぶ。(やれやれ……困ったもんだ)

さっきから胸の内に、もやもやとした苦いモノが煙のように横たわっているというように、播野は嫌というほど気づいていた。

DATA 8 負の連鎖地獄

「先生、やはり急にアルコールを止めてしまってもっと酷くなってしまうんでしょうか」

医師の脳裏を見透かしたように妻は、“アルコール依存”の文字ばかりが頭の中をぐるぐると廻っているせいなのか、パソコンの画面と向き合って何やら考え込んでいる医師に口を切った。

「そうですね。ええ、確かに飲酒を止めてしまえば煙草を吸うのを止めた時と同じく離脱症状、いわゆる禁断症状というものが現れてしまうでしょう」

アルコールの摂取を中断した際における様々な禁断症状とは、軽いものであれば頭痛や不眠・苛々・いらいら感・発汗・手の指や全身の震え（振戦）・眩暈・めまい・吐き気などが起こりやすくなる。しかし、重度になると「誰かに襲われている」といった妄想、いわゆる振戦せん妄や痙攣・けいれん・発作（アルコール誘発性てんかん）なども起こるようになってくる。

「先生、この人お酒を飲まない期間にですね、わたしが朝出掛けていもしないのに、たまに台所にいたとか訳のわからない事言います時があるんですけど、やはりこれも…」

「そうですね。それも禁断症状の一つで幻覚が起きている証拠ですよ」

播野は、眼の前にいる患者らのほうを向かずに相変わらずパソコンにかじりついていたが、凜とした表情・かおやつきを取り戻し、医師としての冷静な態度を保とうとしているようであった。

この“幻覚”も頻繁に起こる症状で、小さな虫のようなものが見えたり、いるはずのない人が見えたり、妙な耳鳴りや人の声が聞こえたりと、患者によってその表れ方は様々であるが、幻覚自体を全く経験しない人も実際は多くいる。そして、患者にとってこれらは苦痛でしかないため、逃れようとますます飲酒に奔るはしめる事に

なってしまうのである。

（この男は少々怒りっぽくなっているな。情動性が不安定だとい
うのが垣間見える…）

「同じ酩酊、いわゆる“ベロンベロンに酔った状態”を感じるの
に、以前の飲酒量では足りなくなっただと思いませんか」

「……………」

「どうですか。別に言葉にしなくてもいいですからイエスカノー
かだけでも」

播野は患者をちらりと一瞥した後、溫柔な口振りで春秋のいつて
いる患者に訊いてみた。

「……………いや、別にねえよ、そんなこと」 作業帽のような
紺色のキャップを頭に深く被ってうつむき加減でいる亭主は、首を
微かに横に振り、ようやく己の感じている現状を眼の前にいる医師
に伝えた。

「そうですか。ご自身ではどれだけお酒の量を飲んでいるかとい
うのがはっきりとお分かりにならない？」

「……………ん……………」

播野は、鬱っぽい病状を呈しているような患者の血色の芳しくな
い顔をまじまじと見入りはじめた。

（やはり自覚はしていないのか…酒に自身を完全にコントロール
されてしまうという、常人では起こり得ない精神の病に罹るかか
っているわけだが…………）

みな大概、飲酒行動を主にアルコールによつて得られる肉体的・
精神的な変容に求める事が多いのであるが、初めの頃は毎日飲む悪
癖はなく、何かの機会に時々飲むだけという機会的飲酒から始まっ
てゆく。

（この患者も会社を定年退職してから、特にこれといった趣味も
なく、身近に水のように溢れている酒に少しずつ染まってゆくよう
になってしまった。症状に至る経緯にはこれまでの先例と変わりは
ないな…………）

彼は、やや前屈みな姿勢になり片肘を突き、手の甲で顎を支えながら、これまで『アルコール依存症』と認められてきた何人ものクライエントのデータを眺めていた。

（二人だけなんだよな、立ち直れたのは。まあ、両方とも頼りにしていた数少ない家族の一員が他界したらしいから、それもあるのかもね……）

播野は深く息を吸い込みながら、また大層らしく腕を組み直した。「先生、ちよつと話は変わるんですが、そういえば隣近所の未だ三十代の息子さんなんか毎夜晩酌してるらしいって噂話でよく聞いてまして、でもアル中とかにはなっていないみたいなんですけど……それって、やはりどうしてもなりやすい人となりにくい人がいるんですかねえ、やはり」

老夫の理解者であり今も昔も変わらざるの細君は、近所で得たたわいのない井戸端会議の話の医師に持ち出し、まるで自分の連れ合いだけがひどく不運に遭ってしまったかのような気がしてならないという心境でいた。

「そうですね。やはり、人それぞれなるならないもありますし、なる原因もそれぞれ人によって異なりますね。社会的ストレスが要因になる人もいれば、他の精神疾患と合併してなる人もいますし、また、子供の時における家庭環境で、依存性が強いまま成長して、お酒に奔^へはし^りってしまう人もいますからね」

（アル中は、酒を飲んだ時に脳から分泌されるドーパミンやエンドルフィンを欲する病であるのだが……まっ、こんな事言ってもわかんないか……）

播野は、付き添いの妻の問いに軽く受け流すようにしてすらすらと答えたが、

「あと先生、やはり体質も関係してくるんでしょうかね」

「いや、アルコールに対して強い弱いという体質は遺伝しますが、依存症になるかならないかはやはりお酒の飲み方次第ですね」

「ああ、そうなんですか。うちの家系はあまりお酒に強いほうじ

やないみたいで。会社行ってるうちの二人の息子もそんなに飲めるほうじゃないんですよ、先生」

付き添いの妻は、不安の色を隠せずに口の辺りを少しばかり左手で隠しながら、アルコールに適応しにくい体質と依存症をまだよく理解しないで混同したまま喋り続けた。

「なるほど、そうですか。それでは尚更過度の飲酒は危険ですよ。ね。お二人の息子さんにもこの病の事はよく話されたほうがいかもしれませんよ」 播野は、いつもの泰然とした態度で、目の前で今“うつ”のように暗く沈んだ面持ちでいる患者だけでなく、その家族に対しても、依存症などに陥ってしまわないように一応前以へもって注意を促した。

友人同士の集まりや親睦会の席などでの『機会飲酒』から、何らかの原因で毎日飲むようになる『習慣的飲酒』に移行する事も多く、習慣的飲酒になると、同じ量の飲酒では同じくらいに酔う事が出来なくなり、次第に飲酒の量が増していつてしまう事になる。これを『耐性の形成』という。つまり、アルコール依存症になってしまいうという事は、この『習慣的飲酒』と密接な関係があるという事になる。もちろん、習慣的に飲酒をする人達全てがアルコール依存症患者であると言う事は出来ないが、何等かのきっかけというものがあれば、更に飲酒量が増し、気がつけば依存症にまで陥っていたという危険性は十二分に孕んでいると言えるのである。

(それにしても、本人が自覚していないっていうのが、この病の難な所なんだよなあ……)

播野は、深呼吸しながら背伸びでもするように組んだ両手を前方へ目一杯伸ばすしぐさをした。

一見すると、本人が自分の判断で好きこのんで飲酒をしているように見え、患者自身も好きだから飲酒していると錯誤に陥っている場合が多い。それ故、患者にアルコール依存の事を告げると「自分は違うんだ」などと激しく拒絶される事も少なくないので、否認の病気とも言われているのである。

「ところで奥さんは、ご主人から頼まれたりしてお酒の代金を与えたり、またビール券などを与えたりしていますか」

一呼吸終えた医師は、何とか飲酒を止めさせたいと心底懇願しているパートナーに対してある意味不意を衝くような、別の角度からの質問を試してみた。

「それがですねえ、私は止めなさい止めなさいとこの人の耳に舐めたことが出来るくらい言っていて聞かしてるつもりなんですけど、…でもですねえ、つ、つい私のほうでも、…な、何て言うんですかねえ、…時たま気を飲まれてしまうと…いいですか、それで……」

これまでほぼハキハキとした口つきで詳細を医師に伝えていた連れも、この時ばかりは意表を衝かれたと思ったのか、話している途中でしどろもどろになって言葉が詰まってしまった。

「わかりました、もういいですよ」

播野は、己の実際の行動について誤魔化そうにも誤魔化せなくなってしまうた哀れな老妻のほうを振り返り、もう話さなくてもわかったという事を片手で示して暗に知らせた。

アルコール依存症の形成を助長するものとして、アルコール依存症になる人の周囲には、酒代になり得るお小遣いを患者に提供したり、患者の過度の飲酒から生じる社会的な数々の不始末（酔って他人に迷惑をかける、物品を壊す等の損害を与える等）に対して本人に代わり謝罪したり、飲酒している患者の尻ぬぐいをする家族など（イネーブラー【enabler】と呼ばれる）が存在する事が多いのである。この患者のケースでも、頻繁に口うるさく関わっているこの妻と医師との会話のやりとりからしてもわかるように、『依存症の周囲』の人に該当し家族にあたる妻が、患者に対して賛成しないまでも酒代を提供してしまっている実情が読み取れるのである。

「先生、本当に申し訳ございません。こんなに主人のだらし無い現状を吐き出すように言っておきながらわたしのほうも何かこの人にお酒を飲まず事を勧めているみたいで……」

付き添いの中年女は、診察室に入ってから自らの言動とそれに

対する行為の矛盾をさも弁解するように、平身低頭として気の滅入った口調で医師にあやまった。

「いや、いいんですよ。アルコール依存症のいる家族などではよくあることです。それよりも今後は極力控えてくださいね」

播野は、情緒の荒んだ思春期の生徒に接するかの如く、紳士的な物柔らかな口調で宥めるように言った。

（イネーブラー自身は患者の飲酒を促してしまうというこの障碍に気付かない事が大多数だからなあ……）

イネーブラーは、飲酒している当の本人の反省をする機会を潰してしまい、延々と過度に飲酒することを可能にしてしまうと言われる。

（一切のイネーブラー達が患者に関わらなければ、彼らはいつかは……）

播野はまた、これまで自らが診てきた患者リストのファイルを開き、悠悠閑々とした感じで、しかし訝しそうな眼つきをしながら、片肘を突いた手の甲で顎を支えてじつと眺め入った。

彼の信じようとしているように、一切のイネーブラーがいなくなったり、医師から直接死を宣告されたりしたことをきっかけに、本人が『底つき体験』（『どん底体験』とも『ターニング・ポイント』とも呼んだりする。“このままでは大変なことになる”という意識の芽生え）をして、それをきっかけとして漸くようやくアルコール依存症から立ち直ることがあるのである。

「先生、やっぱり少しだけでもこの人に小銭なんか与えちゃ駄目ですよ」

患者の傍へそばへに寄り添う老婦は、憂色漂う面持ちを表情へかおへに作ったまま気弱げに、自らの今後取るべき態度を再確認するように眼の前に座っている医師に尋ねた。

「ええ、もちろんそれはさつきも申しましたようにご主人さんのためによくありませんね」

（嬢天下とはこのありさまをいうのか？……）

（もう一人治療したほうがよさそうだな）

播野は、引き攣つたような苦わらいをどうしても表情に浮かべざるを得なかった。

アルコール依存症の患者だけでなく、その家族も問題となっている可能性もあり、アルコール依存症本人の治療だけでなく、その配偶者などに対しても適切なカウンセリングなどが必要となる場合もあるのである。おそらく播野は、患者の配偶者である妻がただ憂慮しているだけでなく、過度に本人に対して干渉してしまっている現状を彼女との会話の中で見抜いたのであった。

「先生……………正直……………苦しいですわい……………しゃれにならんよ、なんだか酒に自分が負けてしまったよう……………ほ……………ほんとに……………」

その時だった。人影のない夜の暗闇の林の中に一人ぼつんと腰を落としているように、暗く無気力の淵に沈んだ表情へかおをしいた還暦過ぎの患者が、突然、自ら切に感じてはいたがこれまで人には明かす事のなかった“現実の苦痛”ってやつを、目の前にいる医師に、やっとの思いで告げたのであった。

「……………あ、あなた、無理に喋らなくてもいいのよ。そのためにあたしがいるんだからさ」

すぐ脇にいる妻は、旦那がやっとの思いで口を切ったのに大変驚いた様子で、両手をせわしなく夫の前に慌てて翳しながら黙っていなさいと云わんばかりに遮った。

(駄目だこりゃ……………)

医師はこの病に対し、苦悩の色を払拭できずにいた。自身が依存的に飲酒していると気が付かないまま呑み続ける。そうすると更に飲酒量が増えて症状が悪化し、負のループに嵌まってしまう。一度この依存症になってしまうと、回復が極めて困難である。いわゆる“上手に酒を飲む”という事が出来なくなるのである。

「落ち着いてください。大丈夫ですよ。今貴方が苦しいというのはこちらも充分に理解へわかっていますので」

播野も、例の紳士的な物腰柔らかい口調で、無理して喋ろうとし

た患者のほうを振り向き、軽く左手を男の眼の前に差し出し、これ以上話し続けるのを止めさせようとした。

アルコール依存症で厄介なのは、自身の深刻な問題だけでなく、依存に陥ってしまった事を周囲の人間のせいにする事も多く、攻撃的で他罰的、自己中心的な性格になってしまふ点である。あるいは逆に、自分が悪いんだ、こうなってしまったのは自分の所為へせいだと言つて自虐的になり、後悔や不安、孤独に苛まれるようになってしまふ事もある。

（この患者の場合は、両方混じっているような気がするんだよね。めちゃくちゃ人に辺り構わず喚き散らすほうではないと思うのだが、かといって自分勝手に振る舞っていないとはいえない。これまで過度にしてきた酒の嗜みに対して自分ばかり責めているわけでもないが、他人に暴力を振るつてしまふタイプとも思えない……まっ、人間なんていつもどつちつかずか……）

“人間”という生命体が絶えず繰り返す、“複雑極まりない矛盾”。五十年余り経つた今でもその謎を解けず至今日まできている。まっ、これは別に彼だけに限つたことではないが。

彼の脳裡へあたまを深く抱え込ませているこの『アルコール依存症』になつてしまつた者は、以前の状態である機会飲酒者に戻る事は殆どほとんど不可能であるとされている。たとえ身体的に回復して、数年にわたり断酒を続けていた者であっても、たとえ一口でもお猪口に唇をつけてしまえば、再び元の『強迫的飲酒』状態に戻つてしまふ可能性が非常に高いのである。

（そうなんだよね……たつたひとくち胃袋に入れるだけでもぶり返してしまう確率が高い、これがとつともなくと言つていいほど厄介なんだよね……）

沈着さを極力失わないでいようとしている医師であつたが、過去に診察した患者のデータを凝視ながら、匙さじを投げたいような苦しい吐息をそつと微かについた。

悪くなることはあつても、決して良くなることはない病であり、

症状・病勢などの進行が止まり、楽になる『緩解』の状態でも再発、つまり再飲酒をどのようにして防ぐかが治療の要となってくるのである。

「まあ、そうですねえ。根気よく治療を続けていくしかないですね。一応、お酒を控えてもらうためお薬を一種類出しておきましょう」

淡い回復の望みと諦めが入り雑じっていたが、それでも明日へのピースを蔑ろにするなど出来ない。

「えっ、先生。今日の診察はこれで終わりになるんですか」

「ええ。ご主人が今どんな状態になっているかっというのはいたい判りましたからね。それよりもとにかく、もう今日からお酒との縁を断ち切らせる事に努めてくださいね」

患者に付き添っている妻は、まだまだ医師に話を聞いてもらいたかったのか残念そうな面容を浮かべたが、播野はといえば、落ち着き払った表情と温柔的な物言いで、患者である亭主の病状をもつこれ以上悪化させないためにも、禁酒しなくてはならないという事を二人に伝えた。

「は、はい。先生。それだけはよく肝に銘じておきます」

ほとほと懲りたのであろう。付き添いの女房は、頭をぺこぺこことさせながら誓った。

「まあ、アルコール依存になってしまった患者みんなに言えることなんですけどね」

（本当に心を改めなければ、この患者もいずれは破滅の道に……）
ふと、播野の脳裏に暗雲が横切った。（な、何があっってお前ら……）

よそう。今はまだ診察中じゃないか。

「先生、あのどうされたんですか。なんか顔色悪いみたいですけど」

「……あっ、べ別になんでもないですよ、大丈夫ですよ」

播野があまりにもこれまでとは違う、何かに怯えているような様

相を呈していたのに早速気付いた患者の嘔（か）かあ（は）は、愁えた表情（か）かあ（は）で、医師を案じた。

「それでは、次回の日にちなんでですが一週間ほどしたらまたこちらに来て下さい。二十八日土曜日の午後二時は如何ですか」

「二十八日の二時ですか。わかりました。その日に……」

「あー、もういいよ、先生。オラア、今日貰う薬とやらを飲んで、それで充分だ。もう来たかねえよ」

「あんた、何言ってるんだい。ちゃんと先生のいう事聞いて治してゆくようにしなきゃ駄目でしょうが！」

妻が次回診察に来る日にちを了承しようとした時、相変わらず生きる屍の如く、顔をむつつりと床に伏せて脚をだらし無く真ん前に八の字におっぴろげていたおやじが、つつけんどんに横槍を入れて医師が示したそれを首をぐるぐる廻しながら拒んだ。

「あつ、あのですね久能さん。今日ただ一回きり診察を受けたのでは治る事は極めて難しいと思うんですよ。やはり何回か通院しながら、ですね。根気よく治療してゆく事が大切なんですな」

診察を嫌がつて子供のようにまたふて腐れた態度を取り始めた亭主に対し、播野も変わらずに落ち着き払った物柔らかな口調で戒めるように言った。「そうだよ、あんた。ちゃんと先生の言う事聞かなくちゃ」

「……………だ、だから、……う、うう……………」

紺色のキャップを深く被ったオヤジは、何かまた楯突こうとしたが言葉を詰まらせてしまい、再びうなだれると、だんまりの世界にまた入ってしまった。

「はい、それではお待たせしました。次回の診察は二十八日土曜日の午後二時からでよろしいですか」

「え、ええ。また来週も先生、どうかよろしくお願いします」

「はい。お大事にしてくださいね」

付き添いの妻は、立ち上がるのも面倒臭そうにしてなかなか動こうとしないでいた亭主に戸惑いとじれったさを表情（か）かあ（は）に浮か

べながら、椅子から引ったくるようにして胴みからだを起こさせると、獄囚を引っ張るようにして診察室を後にしていった。

(はあ……………まったく、人間ってやつは理性よりも感情が先走ってしまっ、なんという不都合な生き物なんだろっ……………まあ…私も人の事は言えないが……………)

見た感じ釣り合わなそうな老夫婦が立ち去った後、播野はまた一人類杖を突き、遣る瀬ない物思いに耽り始めた。

そういえば、ついさっき頭をよぎった“あの暗雲”。

前方には黒く重苦しそうな扉が一つあり、そこへ何人も男達がうなだれるようにして次々と入ってゆく。そんな光景が、映写機から展開されてくるフィルムのように突如として、彼の脳内を占拠し始めたのであった。

(……………な、何があつて突然、こんな悪夢に襲われるような、嫌あな感じにならなきゃならないんだ……………)

眼の前が真っ暗となり、黄ばんで薄汚れた頬に汗が一筋、髪の毛の生え際からくつきりと流れ、尖った顎に水滴のように溜まった後、空しく机の端に落ちていった。

“死に至る疾患”

前者をどうにかして抑えようとすると、今度はまた違った、しかし同じく気味の悪い光景が無意識のうちに支配してきた。煉獄のよくな漆黒の狭い洞窟のなかで、十数名の男女が盃々さかずきやグラスを眼々ま々の当たりにし、片方の腕を前方に大きく伸ばしたり、頭を握り拳で叩いたりしてもがき苦しんでいるではないか。ビールや日本酒、焼酎やウイスキーの瓶が載っている古ぼけた木製の十数台がほんの少しずつゆっくりと、わめきもがいているこれらの連中の手の届きそうなところまで動いてくる。

「…ああつ……………ウ……………ウオオオオオ……………」

しかし、アルコール飲料を載せた木製の台は無常にも、飢え苦しんでいる人達の手の届くあともう数センチというところで、後方へ

ゆっくりと少しずつ軋（き）むような音を立てながら、狭い洞穴の縁（へり）まで戻っていつてしまうのであった。そしてまた、間を置かずにアルコール類を載せた台は罪人のように醜（みにく）い容貌（がた）なり、をした彼らの下へ少しづつゆっくりと向かってゆく。身体を鎖で拷問の如く縛られてみすばらしい恰好をした男女達は、自分らのほうにやってくるその古ぼけた木製の台に絶えず眼を遣りながら大きく片手だけを伸ばして、一列に並んでいる誰しもが、喉の奥からもう今か今かと呻（うめ）き声を発していた。今度こそ渴望していた酒を思う存分浴びることができるかもしれない、みなそう信じたに違いない。餓鬼のようにぎらぎらと鈍く光っている眼がアルコールドリンクを載せた台が近づいてくるにつれ、いつそう不気味さを増してくる。手の届くところまであと、五センチ、三センチ、一センチ……がしかし、またその木製の古ぼけた台は、眼に見えない何物かの手によって遠隔操作されているかのように、再び後ろへ後ろへと下がってゆく。そして、アルコール飲料を目一杯敷き詰めて載せた古ぼけた木の台は、これらの動きをまるで浜辺にゆっくり打ち寄せては退（ひ）いてゆく波のように幾度も幾度も繰り返していた。

「ウ、……ウオアアアアア」

囚人のように鎖に繋がれた十数名の表情（がた）はお（お）は見るに堪えないほど醜（みにく）く、そのおぞましい光景はまるで地獄絵図を眺めているようであった。

「ウオアアアアア」

それほど広くはない洞窟の中いっぱいに、欲望を満たす事ができずにいる酒の亡者達の激しい金切り声が響いている。

「ウワアアアアア」

（い、嫌だ……こんな恐ろしいこ、光景は、……俺は望んでなんかいない……）

脳裏（うち）あたまの奥深くに、耳鳴りとは似つかぬそれらの叫び声（こゑ）がけたたましく響いてきている。播野は我知らず、耳元を両手で押さえ付けてこうべをガクリと机に伏せた。

(私は、……俺は……患者に良くなつてほしいから、……いや、……不埒な、……変な考えなど、……ばかりではないさ……)

突然、悪夢のようにふと湧いてきた情景に、播野の意識は自身でも信じられないくらいに掻き乱された。実際その場に居合わせたかのような戦慄つてやつが、心中の隅から隅まで駆け巡つてきた。

悪くなることはあつても、決して良くなることはない病

この究極のフレーズが、まるで大脳に知らず知らずのうちに刻印されてしまったのか、意識から拭い去ろうと必死に苦しみ喘ぐあえいでも、そう簡単に、長年自ずから積もらせた観念を消し去るわけにはゆかなかつた。

(とにかく、とにかく落ち着くんだ……俺がこんな調子じゃこの先のクライエントはどうするんだ……頼む、しっかりしてくれ、……俺……)

播野は、机の上に苦悩に歪んだ顔を伏せたまま、両手には握りこぶしを作り、それを歯痒そうに幾度か叩いた。二進へにつちも三進もゆかない“現実”という憎たらしいほどの“大きな壁”。己の非力さを悔しがるように、白髪雑じりの頭ごと伏せたまま揺さぶつた。

「……先生……先生、どうかされたんですか」

いつの間に入ってきたのか、気がつくくと、受付のもう一人の女である菅谷が、すぐ背後で憂い顔をのぞかせていた。

菅谷は、四十半ば過ぎの色白で顔のむくれている俗にいうぼつちやりとした体型の女で、播野とほぼ一緒にこの医院にやってきた古株である。以前は医師と同じ病院に勤めていたが、播野が開業するという噂をいつしか聞くと、なぜか菅谷も、地元では知名度の割と高くなつた今いるこの小さな医院に赴任してきたのであつた。

「……あ、ああ……」

播野は、力無く覆っていた顔を菅谷のほうにゆつくりと向けて微かに首を縦に動かした。がしかし、その表情は病人のように蒼ざめて、額からは汗がまだ滲み出していた。まだ、いったい自分のなかで何が起こってしまったのかよく理解へわかやらないでいた。

（嘘だ……私は、……俺は決してそんな酷い仕打ちはやっていない、……やっていない、……と信じるしかないさ）

これほど、彼が診察の合間に自身を取り乱してしまったのは、非常に珍しいことであった。患者に接する時のような泰然自若として穏和な柔らかい物腰が、この時ばかりは消え失せていた。

「……な、なんでもないさ。……大丈夫だよ。ただ、……少しだけ……五分間だけ時間をくれ」

「あ、はい……」

受付の菅谷は、播野の舌も引かぬうちに一寸ちよつとだけ頷くと、何かを悟ったように目配せをしてその場から離れた。しかしドアを閉める間際、治療に携わる医師の筈が逆に病人みたくふにやんとして腰掛けている情けない医師の後ろ姿をあらためて目の当たりにすると、氷のように冷たい眼を凝らしながら静かにゆつくりとドアを閉め、元いた場所へとおもむろに戻っていった。

自らを突如として襲ってきた悪夢のような情景はさておき、播野が医師として診察の最中でも深く考え込んでしまうのも無理はなく、『アルコール依存症』は予後「病の治療を施した後」の死亡率が三割と非常に高く、酒をたとい控えめでも飲んでしまった患者と通常に飲酒した患者との間に差異は見られず、完全に断酒することによってのみ、生存率が高まってゆくのである。

（悪いのは、……人間の意志の弱ささ……。一口でも飲めばまたアル中が再発する、だからもう絶対に飲まないと一度心に決めた事は貫き通す……。こんな簡単なことが何故、なぜ人間にはできないのか……。理性という動物にはない素晴らしい特徴を生来備えているのにもかかわらず……。だ……。愚かだ、……。あまりにも愚かな気

“酒を断ち切ること”

幾度も幾度も念仏のように繰り返されるこの決まりきった文句を、播野自身も唱えたが、途中で風に煽られて消えた儂い蠟燭の灯へともしびゝのように、声は次第にか細く途切れてそのまま口を噤んでしまった。

アルコール依存症は本人の意思だけでは解決する事が困難なため、周囲の理解や協力が自ずと求められてくる。たとえ治療によって回復した場合であっても、アルコール依存症に一度陥ってしまった者が一生涯断酒を続けることは大変な困難を要するのが実情である。ここがさつきからずっと、筆者もくどいくらいに強調している点であるが。

「……まあ、苦しむのは俺じゃないから……別にいいんだけれど……」

そう、また医師はぼそつと皮肉っぽく呟いたものの、脳裏へあたまにはつい先ほどまで診察をしていた、あのカーキ色の作業衣のような薄汚い格好をしてほとんど口を利かなかった患者のみすぼらしい哀れな姿が糞尿のようにこびりついて離れないでいた。

(……はあ、俺のやってる仕事はまるで、他人へひとりの生き様まで背負わなくちゃなんのか……)

ふと、皮肉とも諦めともつかぬ嗤いが、彼の唇の辺りを気色悪く歪ませた。こんな時医師はきまつて、気が狂ったようにキーボードを出鱈目にカチャカチャと打ち鳴らす。どうしようもなく抑え切れない感情。アルファベットの文字列が、その衝動にまかせて激流のようにセルに素早く刻み込まれる。何行も何行もそれらは意味もなく、ただ無味乾燥に並べられてゆく。ひよんな事から、大脳辺縁系の感情を司る扁桃体は異常を来たしてしまうのか、常日頃の冷静さを失い、容易に情緒が掻き乱されることも、この頃では珍しくないような気がする。

「畜生……これも一種の職業病ってやつか……」

(ま、……俺には……アレのせいも、……あるだろうがな……)

と、播野はまた意味ありげな薄嗤いを一瞬表情へかお々に浮かべ、組んだ両手を気怠そうに頭の上に高く掲げ、そして吐息とともにパツと投げ出すように離れた。

“ピーッピーッ”

彼の悪い癖で、長々と物思いに耽っていると、内線の呼び出す音が甲高く聞こえてきた。

「はい。もう大丈夫だから」

受付のほうで気掛かりに思っているさまをその甲高い音ですぐに感じ取り、播野は素早く受話器を片手に取った。菅谷が何やらあれこれ愚痴をこぼしたのには取り合わず、開き直ったようにただ早口で、次の診察が出来るコンディションに戻った旨を伝えると、直ぐさまそれを急ぐように元有った所へ置いた。

(……まあ、考えていても仕方がない) 「次いくとしよう」

室内には、長年密かに愛用している、フルーティーでエレガントな匂いが特徴のアロマオイル『ダウ』アナ』が、相変わらず心地良い、優しい癒しのする甘い香りを放っていた。

DATA10 赤面、そして沈鬱 元モデルの悲劇

「はい。お待たせしました。番号札十五番の方診察室へどうぞ」

「失礼します」

医師の眼の前に表れたのは、エルメスの格調高いフレグランスな薫りを全身に纏わせ、尻の上まで伸びている長いダークブラウンの髪をした未だ二十代と見て取れる女で、見た感じ背も一般の女よりも高く、一七 近くはあった。降り積もる粉雪のように色白な顔で、ポーカーフエイスを気取っているのか今時の若い女に流行りのでかいスモーク色したサングラスをかけていた。白い薄手のロングカーディガンはどことなく女性らしい繊細さを感じさせ、極めつけはその内側の黒のキャミソールから垣間見えるふくよかな胸の谷間であり、これには堅物で気難しい雰囲気を持つ播野も思わずそこに眼がいつてしまったほどであった。下はこれまた似合う、だぶだぶで作業衣のようにも見える濃いグレー色をした巷々ちまたで流行のイージーパンツをさりげなく穿きこなしていた。

（すごく洒落ているのはわかるが、さすがに病院に来る恰好ではないよな）

場違いというか、なんとなく気恥ずかしいという感情にも駆られてくる

（この女、雰囲気からするともしや……）

好奇心のアンテナを張り巡らせて医師は、眼の前に淑々しとややかに腰掛けた彼女がどんな職業に就いている人なのか、又は今までどんな職業に就いていた人なのか何となく頭の中で見当をつけようとした。そこら辺の街中を歩いている女よりも、睫毛のところは小洒落れた感じになっていて、何より人形のように飛び切りぱっちりとした目許が特徴的なのであった。

「はい。大変お待たせいたしました。…今日はどうされました？」
滅多に来ないであろう貴重なクライアントに恵まれて、彼は心の

踊りを隠さなければならぬくらいになり、妙な胸の高鳴りが少しずつ湧いてくるのが自身でも感じられた。ドクターとしての矜持もあるかもしれないが、常日頃から殆ど言っているほど、「医師」という重苦しい『仮面』を被っている播野。心の奥底に潜む“本当の自分”という存在を世間体を気にして表に出せないでいた。この時も始終『マスク』は脱げずにいたが、腹の内では素のわれがかわいい娘ではないかとニヤついていた。不覚にも表情へかおやは、そんな不埒な念いが投影してか、子供のように赤らんできたように感じた。汗が滲んだり滴り落ちたりしていないにもかかわらず、彼は額や頬の辺りを少しばかり拭う仕草をした。播野は何か自身の胸の内に起こっているざわめきを悟られたくない、いつものように落ち着き払った崇高そうな表情へかおやを懸命に作り、現在へいまどどのように病んでいるのかについてゆったりとした口振りで切り出した。

「……………えっ、ええ……………」

いつのまにかスモーク色したサングラスを外していた若い女は顔をほんの少しあげて何か言おうとしたが、すぐにぱちりとした幼さの残る瞳は医師から離れて、透き通った柔らかな肌はちよつとずつ鮮やかなピンクに染まっていった。人前で話するのは恥ずかしいという感情だけが患者を支配しているようであった。そのくせどというわけか、退屈そうに左脚を右膝の上に組みはじめた。図々しい奴、とはこの時ばかりは思わなかったが、そのかわりに、

（だいぶ緊張しまっているようだな、こりや……………）

「少しだけでも、ゆっくりでいいですから話していただけですか」
女のほうから向き直ると播野は、丁重な物腰柔らかい例の紳士的な口調でお願いするように言った。ぱちりと開いたその円へつぶらな瞳孔へひとみへは、よく見ると、若人らしい輝きがなんとなく失われてしまっているのが、すぐ見て取れた。例えるならば、色褪せた宝石……そんなところであろうか。

（見知らぬ人の前ではかなり抵抗があるようだな。これはやはり

……)
「ほんの少しだけでも構いませんから……お話してただけませんか」

播野は、さきほどよりもさらにゆっくりと、己を抑えて譲歩するように話を繋いだ。患者の前ではいやがおうでも“誠実で穏和な医師”に扮している播野だが、さすがに程度つてやつがあるようである。不覚にも苦たらしい面構えに変わったのが自身でもわかり、小さな咳ばらいをひとつ左手の握りこぶしの上で洩らした。視線を床のほうに遣って人形のようにじっとしている若い女に対し、何とか重い口を開いて貰わなければと思い再度試みた。気がつけば、未だあどけなさの多分に残る彼女の力才全体は火を噴いているように真紅色じゃないか。

「……あつ、……はい……なんか人とうまく……上手に、……うまく喋れなくなってます」

女はようやく、途中何度も口を滞らせながらも、いま現在において日常生活に支障をきたしている事柄の一つを医師に伝える事が出来た。

「人と普通に会話する事が出来なくなりました、という事ですね。なるほど。……しかし、私が察する限りでは貴方それだけではなさそうに見えますけれど、あなたご自身でもお気づきかと思われませんが……」

「……え、……ええ。わたし、人前で……いつの間にか……ものすごくあがつちやうようになっちゃって……それで今も、……わたし顔、……真っ赤になっちゃってると思うんですけど……」

女が途切れ途切れで話している最中、播野は狐のような怪訝と憂色の雜じった眼つきで患者の表情へかおをさりげなく見据えていたが、無理にでも話そうとすればするほど、換言すれば時間が経過するほど、若い女の声が震えてきたのがわかった。極度の不安や恐怖に襲われている様子が瞭然と伝わってきたのである。

「そうですねえ。貴方のおっしゃるとおり、たしかに通常の人と

比べて話をすることになり抵抗があまりのようですね……」

「今はどんな職業をなされているのですか」

「……………あつ、……………えっと……………去年の夏まではモデルを、…モデルをやったんですけれど、……………こんな、こんな感じで長く務まらなくて……………それで、……………今は何も……………」

若く優婉なオーラも匂わせている彼女は、声を出して話し出しそうとする度に顔は火照ったように赤くなった。ぎこちない歯切れを振り切るように息遣いを些か荒くしながら、医師の返事にはきちんと言えなきやと自覚していたのだろう。声を発するたび、小刻みに頷くような科へしぐさ^ゝが痛いほどに伝わってきた。

症状が現れるまでの経緯

このあどけなくどこか頼りない平幡莓夏^へまいか^ゝという女、地元の高校卒業後は五年間アパレル関係の店で働いていたが、二十三歳の夏、都内の原宿に友達と遊びに行った時に偶々^へたまたま^ゝ茶髪のけばけばしい形^へなり^ゝをした男にスカウトされたのがきっかけで、その年の秋、某モデル事務所所属のファッションモデルとしてデビューすることになったのであった。幼少の砌^へみぎり^ゝからずっと慣れ親しんだゆったりと時間が過ぎてゆく田舎街を離れ、気がつけば莓夏は、アスファルトのジャングルに限りなく覆われ、日々駆ける兔のように目まぐるしく過ぎてゆく慌ただしい殺伐とした人込みの雑踏の中に身を投じていた。巨大な駅ビルの中では、高級そうなオメガの腕時計をちらちらと忙^へせわ^ゝしそうに気にしながら出口へと疾走してゆくサラリーマン達、同じくお高いエルメスのバッグを悠々と抱え、ポーカーフェイスで闊歩してゆく何人もの〇し、異邦人のように銀色に染めた長い髪を時々片手で弄りながら、ダラダラと固まりながらベチャクチャ喋って歩いている女子高生の群れ、ワインレッドのブラウスで身をスマートに着飾り、大きな鍔が特徴の洗練されたノエルの帽子を洒落たように被っている幾人か

の婦人、西洋人のように長身で、ローデンストックの知的な雰囲気
を醸し出している老眼鏡をかけた老翁……。何もかもが苺夏にとつて
は真新しく、初めのうちは、早朝に踏みしめて歩く新緑の散歩道の
ようにさえ生き生きと感じられた。

「苺夏ちゃん、もう東京は慣れた？」

女マネージャーの黒川は、彼女の緊張を解きほぐすように柔らか
い表情へかおぐでにつこりと微笑んだ。

「最初の撮影はモノトーンのセクシィワンピースに黒の柔らかカストロ
ーハットでいこうじゃないの」

金髪の、苺夏と同じ年代くらいのマネージャーは、おどけたよう
に軽いノリでモデルデビューの初舞台の案件を切り出してきた。想
像以上に華々しい幕が開けたのに面食らったせいか、かえって表情
には戸惑いの色が浮かんできた。

「大丈夫だよ。そんなシリアスに考えなくても。みんな誰でも最
初は緊張してしまうものだから」

女マネージャーは再び、庶民的かつ安堵感たっぷりな愛嬌ある微
笑へえみ〜を顔全面に湛えながら、新人モデルにありがちな不安っ
てやつを取り除いてあげようと努めた。撮影は三日後にすぐ、渋谷
界隈の小さなスタジオで行われる事となった。日を追う毎に秋は深
まり、二カ月前なんかと比べると信じられないくらいに青い空のキ
ャンパスが爽やかに感じられていたが、その日は氷菓を頬張ってい
ても驚かれないくらい異様に日差しがぎらぎらとして、昼間は汗ば
むくらしいの陽気となった。苺夏はこの撮影当日、花柄模様のワンピ
に紺のジーンズ姿で出掛けていった。モデルデビューをするという
こともあり、スタジオへ向かう人込みのなか、期待と不安という水
と油のような二つの感情が、繊細なココロの天秤の上で絶えず揺ら
いでいた。面持ちも何となく頼りない。

「あつ、苺夏ちゃんだ。こんにちは。今日は初めてで慣れないポ
ーズばかり指示されると言うけど、焦らなくていいからね。ゆうっ
くりと、カメラマンさんの言われた通り落ち着いてやれば全然大丈

夫だからね」

四方を鼠色の古ぼけた雑居ビルに囲まれた、大通りから外れて二百メートルほど裏路地に入ったところに構える小さなスタジオに着くと、さっそく、金髪の気さくな女マネージャーが例の天使みたくとろけるような笑顔で今日も彼女を温かく迎えてくれた。黒川の小さく束ねたポニーテールが、今日はひとときわ輝いているように見えた。

（大丈夫かな、わたし……。ちゃんと言われた通り、うまくキメられるかなあ……）

もともと内気な性格の苺夏は、胸中で既に尻込みをしまっていた。カオにもそれがゆつくりと滲み出てくる。

マネージャーが優しい言葉遣いや気の利いたユーモアで緊張感を解きほぐそうとしてくれても、“不安”という感情は最後まで、靄のように脳裏へあたまにまとわりついて離れなかった。誰でもみな同じだよとかるく考えれば確かにそうだが、しかしこの彼女の場合、その“度合い”のメーターが尋常値を超えていたようであった。

「さあ、それじゃさっそく撮影のほう入ろうか。後は任せてよ、黒川さん」

室内の奥に脚をだらりと投げて座っていた、鶯色のちよつと冴えないニット帽を被っていた三十過ぎくらいの男が、気怠そうにして灰色の椅子から立ち上がり、怯えているような表情へかおをいしてじつとマネージャーの傍に寄り添うようにして突っ立っている苺夏に対し、異性を口説くような気障へきざざっぽく甘い声で促した。マネージャーの黒川は、了解しましたと言わんばかりに無言でカメラマンらしき男に目配せをして、

「それじゃ苺夏ちゃん、頑張つてね」

口早にそう言い残すと、チーターのように軽い足取りでささつとその場から立ち去っていった。

「平幡さんだっけ。俺、専属カメラマンの日ノ岡っていいいます。よろしくねえ」

スタジオで二人きりになった瞬間、すぐに男は得意気に腕組みをして、ひどく甘くて生温い声で自らを名乗ってきた。そのくせ顔のほうはといえば真っ黒に強く日焼けしていて田舎臭く、お世辞にも二枚目とは言えない容貌であった。

「……あ、…あの、…今日わたしは……」

「撮影内容は聞いてるよね。セクシィワンピ着てファードシアンハットを被るってやつ。で、今日撮るものはさ、君もよく知ってるあのVから始まるファッション雑誌に掲載される予定になってるんだ」

「まあ、楽しんでリラックスしながらやっていこうよ」

苺夏はかなり相好を強張らせながらも、眼の前のカメラマンに何か尋ねようとしたが、か黒い顔の彼はそれに気付くことなく、直ぐさまさらさらと今日行つ撮影がとある有名ファッション雑誌の被写体になるといふ事を明かし、そして、初めての為か張り詰めている彼女の気持ちを解きほぐそうとでもするかのように、甘く誘つような声遣いをして伝えた。なにやら饒舌そうな男である。

「さてと。じゃあまず右奥の部屋で白のワンピとブラックの中折れハットがあるから着替えてきて欲しいんだ」

「……あつ、ハ、…ハイ……」

「そんなに気を張らせていなくても大丈夫だから」

本格的な撮影に入る前に、奥の控室みたいところでファッションブランドの衣服を身に纏うのだ。この場面でも苺夏は、相変わらず怯えたような表情へかおののまま、顎をほんのちよつとだけ下にならずして頷きながら、小さい声で了した。悪怯へわるびゝれたみたいような容色へかおつきゝのままにいる彼女が少し滑稽に思えたのか、日ノ岡は悪戯っぽい眼睛へめつきゝに哀れみの感情を込めて励ますようにに言った。苺夏はそつと、申し訳なさそうに顔を少し朱へあかゝく染めながらお辞儀をすると、恥ずかしさのためかやや差し俯きながらゆっくりと、奥の着替えをする控室へと歩いていった。

（大丈夫かな…あの「……」）

カメラマンの日ノ岡は、やはりそわそわとした面持ちを隠せず、控室のドアノブにおずおずと手をかけて入ってゆくまでの様子を訝しげな眼で追っていた。いくらなんでも初めてのプロフェッショナルな撮影とはいえ、あの若い女はあまりにも人見知りし過ぎるきらいがあるじゃないか、と想着てきたからである。ブランドの衣装に着替えを済ませるため奥の部屋にこもってから十分ほどして、今日モデルデビューを果たす女はちよつとだけはにかんだような愛らしい顔をしてカメラマンのもとへと戻ってきた。

「よ、…よろしく願います…」

と、盛夏は畏まつて深々と頭を下げ、挨拶をした。

(少しは落ち着いたかな……)

そして瞬く間に桃色に染まった若い女の頬が幼く感じられたのか、カメラマンはまた悪戯っぽく眼を細めて、

「オツケー。それじゃぼちぼち撮っていいこうか」

カメラのあるほうへ素早く廻ると、色黒い肌をしたカメラマンは少年のように無邪気な表情「かお」で破顔一笑して、ジェネレータータイプのストロボを小刻みに暫しのあいだ動かしていた。真正面には丁度、レフ板と呼ばれる銀色のニメートルくらいある円形の大きな板が立て掛けられていた。そして左右には、長方形の形をしたHIDのスタジオライトが、円形のレフ板を中央から端にかけて陽の光のように照らしていた。被写体であるモデルは、このレフ板を背にしてカメラを向けられる。ライトからの光と銀色の円形の板からの二方向の光が被写体であるモデルに反射する事により、常時よりも明るく立体感を伴って見える効果をプロ撮影では利用するのである。

「さあ、それじゃあ、盛夏ちゃん。ライトで照らされているその銀色の円の前に立ってごらん」

「…あつ、…ハ、ハイ……」

粹を帯びて甘く弾むようなカメラマンの声に盛夏は、気弱げにうなずいて表情「かお」を幾分真ん前から逸らしがちにして、光の当

たっているレフ板の前まで足弱な子供のようにゆっくりと歩いてきた。

「よし、そこそこ。おっ、姿勢イイねー。撫で肩のあたりなんかもセクシイだし。色っぽいよ、色っぽい。君、マジで」

日ノ岡は、気障とも受け取れるような甘すぎる声色で、緊張感に包まれている新人モデルを褒めちぎった。若い女のほうも、ここに来てやっと、杏仁豆腐みたいに透き通った白い頬を思わずニツコリとほころばせることができた。

「あははは…、何それ、おもしろい」

甘い声とは裏腹に蛮骨そうな真つ黒い顔をしたカメラマンは、彼女によりリラックスして撮影に臨んで貰おうと面々かおを可笑しく歪ませたり、ちょっとした冗談口を聞かせてあげたりした。張り詰めた胸中の結氷の牙城はなんとかようやく崩れ落ち、モデルデビューをする若い女は両手で唇の辺りを覆い隠すようにして、失笑の声を洩らした。控え目で優婉な雰囲気も併せ持った彼女のそれは、嬌笑と言うべきなのかもしれない。可愛らしく緩んだ目元に釣られたのか、日ノ岡も黒奴のように褐色に焼けた顔を童児のようにしわくちやにさせながら、声を出して貰い笑いをした。

「よしっ、それじゃあ平幡さん、そろそろ本腰いれましょうか」
虫取り網を肩に引っかけて勇んで歩く小童々こわっぱのよう田舎臭くも無邪気な表情へかおを全面に浮かばせていた男は、本番に入るべく合図のコトバをかけたが、甘いながらもどこか辛辣味を帯びた声色で、いよいよこれから気合を入れて撮影に取り掛からなければならぬんだ、とでも暗に伝えるように表情までもにわかにはシリアスになった。少しばかりじゃああったようなムードから一転、突如厚い雲に覆われてしまったかの如く、感情を司る大脳辺縁系の扁桃体では、妙に重苦しいよというシグナルを受け取ったらしい。もともと内気で繊細な心の持ち主みたいだ。いわゆる感受性が強いっていう性質へたちなのか。それがこういう華やかな場面でもうまく発揮してくれれば申し分ないのだが。だが、筆者

が願うほど、筋書きどおりにはゆかないようだ。カメラマンは今回の撮影概要の資料をばらばらとめくっていたが、やがて被写体となるモデルのほうへと眼を移し、

「はい。じゃ撮っていくよ。俺の言う通りポーズ取ってっつねー」
日ノ岡はすかさずストロボのレンズに眼を遣り、そこでピントを合わせるため、少しの間じっと顔を動かさずに真正面で構えていた。

「はい。じゃー彼女、左の撫で肩になってる所をもう少し意識して下げてさ、んで身体も若干おなじく左に前屈みになるような感じにしてもらっていい？」

「……こ、こんな感じ……ですか？」

カメラマンの甘く明暢で気取ったような声での指示に対し、莓夏は自身の中ですんなりその内容が飲み込めたのか、意外に割と素早く言われた通りの姿勢を作る事ができた。

「そうそう、そんな感じ。いいねえ、莓夏ちゃん。それでその恰好のままさあ、両腕はだらっとカラダの真ん中に下げるカンジにして」

「……ハ、ハイ……」

「そうそう。んでさ、腰は左に反らしてもらっていいかな。色っぽく読者には見せたいから」

「あつ、………ハイ」

それなりにキャリアの長そうなカメラマンは、如何にも業界人らしい軽いノリの口振りで、モデルデビューしようとする若い女に次々と撮影に入るためのオーダーをぶつけてゆく。莓夏はいえは、多少それに気後れしながらも、指示された通りのポーズをきちんと決めていった。

「そうそう、いいねえ。セクシイだよ、莓夏ちゃん。それからさあ、正面に対して右に四十五度くらいの方に顔を向けてさ、意識的にあどけないって思える表情を作ってもらえる？」

「………こ、こうですか」

モデルの若い女は、少女のようなことなく愛らしい顔貌へかお

つきやをして見せたが、ふだん人前ではなかなかオモテに出すことのない表情に恥じらいを感じてしまったのか、すぐに頬はまた淡い桃色から朱色へと染まってきた。カメラマンもその変化にさっそく気付いて、幾分驚いてかモデルの赤らんできた表情「かお」のほうを少しばかり注視していたが、

「お、おーい。そんなに恥ずかしがることはないぞ」

「……………い、いえ。……………別に、……………大丈夫です」

日ノ岡の懸念の籠った問いに、苺夏は軽く目許を緩ませてその場をどうにか取り繕おうとしたが、さっきから面「かお」に胸中の心境が表れやすい自分がいると思うと、なんだか気が気でなくなってきたのであった。

「ちよっとすみません。トイレ行ってきてもいいですか」

「えっ？あつ、うん、別にいいけど……」 「ごめんなさい、すぐ戻ります」

そう言っただけで彼女は、そそくさと何か隠し事でもあるように、片手で顔を隠しながら、視線も落とし気味にしてその場を一時立ち去った。

(どうしよう……………今までは緊張してもこんな顔赤くなっちゃうことなかったのに……………いったいどうして……………)

(……………今あたしがしてるのは仕事なんだから……………そう、だから……………)

トイレの鏡の前で苺夏は、心中の陰翳を含んだ姿をそこに映し、空ろな眼をして立ち尽くした。何とかして、本来のあるべき自分を呼び戻そうと、妙に焦りの感情さえ出てくる。

(大丈夫。……………別に何も恐い事なんかないんだから……………)

下唇を少しばかり噛み締め、自らを奮い立たせるように、小さなてのひらに握りこぶしをぎゅっと作った。それでも未だ胸の内、あの何と表現したらいいかわからない空恥ずかしい気持ちもどかしく蠢いている。また不意にすぐ、カメラが廻っている最中にそれが襲ってくるんじゃないかという不安が、どうしても拭えない。

「おい平幡さん、聞こえるかな？もういい加減大丈夫かな？」
「こつちも時間で動いてるからさ、早めに戻ってきてほしいんだけど」

憂悶とした心情がまだ残滓のように胸の片隅にへばりついている時、廊下のほうからくだんの異性を口説き落とすような甘くて気障っぽい声が聞こえてきた。撮影の最中に立ち去る時の様子が異状に思えたので、何事が起こったのかとカメラマンは心配になって声を掛けに来たのであった。

「……あつ、……もう大丈夫だと思います。……ごめんなさい」
「どつか気分でも悪くなったの？そんな時はちゃんと一言伝えてね、撮影のほうは中止するから」

トイレにきちんと入ったふりをするため、苺夏は白い薄手の綿のハンカチをさりげなくポケットに忍ばせながらようやく出てきた。

「すみません。お待たせしました」

「おお、大丈夫かい？」

「口の辺りを片手で覆うような恰好して出て君がいったからさ、今日はもうもしかしたら駄目かと思っちゃったよ」

「あつ、…ホントに……すみませんでした……」

「さつ、それじゃすぐ向こうに戻ろうか」

何事もなかったかのように笑みを作りながら女を少しだけ顧みてそう言うと、日ノ岡はまた一人先に、元いた自分のポジションへと足を運ばせていった。

それからは、撮影のほうはお昼までほとんどこれといった問題もなく順調に進んでいった。休憩はわずか三十分だけしか取れず、すぐに午後の撮影が慌ただしいなか始まった。ろくにお昼の時間が取れなかったのか、カメラマンの口元をよく見ると、橙色をした食べ物に染みかすが唇の端っこのに少しだけべったりと付着しているのがわかった。苺夏はふとそれに気が付くと、クスツとまた失笑を表情に浮かべた。日ノ岡はそれに気付くと、悪戯っぽくおどけたような視線をちよいとだけ投げ掛けた。

「平幡さん、初っ端から長い撮影でごめんねー。本来なら初めてだし少ないカット数で終わるんだけどさー。…でもどうしても事務所が君を推したいっていうし、………まっ、それだけ君は期待されてるってことだよ」

「………えっ、そんな、………私が、………ですか…?」

「そうだよ」

嬉しいような、恥ずかしいような、苺夏は、唇の辺りを片方の小さな白い手で軽く覆い隠し、まさか自分なんか信じられないという気持ちをすぐ表情へかお々に表した。そんな彼女に対し、カメラマンはまるで恋人でも意識するかのように小さくウインクをすると、再び束になっている資料をぱらぱらと忙々せわ々しそうに捲り出した。

「じゃあ、今度はまた別のポーズを作ってもらおうかな。っていうか苺夏ちゃんホントそのロータスのミニワンピースとリネンハット似合ってるよねー。黒川さんが久々のニューホープが来たって言うってだけのことはあるよ、キミ」

「やっぱ、カワイイね」

「さて、気を取り直していこうか」

撮影に際しての段取りを細かくチェックし終わると、カメラマンは午前中と同じく、彼特有の甘い声色でモデルに対してその気にさせるような文句をぼんぼんと提供していった。小難しい理由などない。褒めちぎる事で、オードブルを眼前に囲んだような気分にならせてあげたかったのである。短いお昼休憩中に彼女は、同じミニワンピースの今度はブラック色に着替え、アイテムである帽子は罅がとにかく広いのが特徴のリネンハットでキメるよう指示されていたのであった。

(マネージャーの黒川さんって、………そんなにわたしのことに気にかけてくれてくれてるんだ………)

慎重な性格の苺夏だったが、少しばかり半信半疑な心境にも囚われつつも、空ろでどことなく蠱惑々々こわく々の眼差しをカメラマ

ンのか黒い顔に投げ掛けた。日ノ岡は、若い娘だけにしか見られないそのどこかいじらしいながらも神秘的ともいえる表情に一瞬吸い込まれていったが、

「はい。じゃあ今度してもらおうポーズなんだけれど、自然な撫で肩になってるのをもう一回意識してさらに左に少し下ろすような感じね。ここは午前中やったのと同じだね。で、今度はさあ、両手をリネンハットに廻してもらいたいんだよね。細かく言うとなさあ、左手の人差し指はリネンハットの鏢に軽くつけるような感じにしてもらって、で、右はさ、髪の毛を掻きあげるような感じで肘を前に突き出して、…それでこっちの手は鏢を直接掴むようにしてもらっていい?」

「あつ、…はい。……………」

「……………こんな感じ、ですか」

「そうそう。いいねえ。肩のラインはもともといい線沿って下りてるからそんなんでいい感じだよ」

(…んで、それで、……………こうして……………)

カメラマンの反応とは裏腹に、盛夏は、個々のつぶさなポーズを幼子のように自分の頭に言い聞かせるようにしてキメていったが、緩慢で何となくぎこちないのが嫌だった。

(それにしても妖精みたいな雰囲気のある女だな。巷の若い娘にはない透明感というものが伝わってくる……………)

日ノ岡は暫しのあいだ、さりげなくそっとモデルのほうを眺めていたが、やはりさつきと同じく、そして魂が洗われるような崇高な感じさえ彼の胸中に染み入ってきたのであった。

「こんな感じ……………ですか?」

「……………あ、お、お、おう。……………おう、そうだね。おおい感じじゃん」

女モデルの小さな呼び声にもすぐには気付かず、ほんの短い間ではあったが、思わず恍惚感に浸ってしまったのである。そしてまた、甘い商売柄の声をして被写体の女を上手くその気にさせようとする。

苺夏のほうも園児が衣服を着るような遅くじれつたい動作をしてはいるものの、カメラマンの指示された通りのポーズを比較的きちんと作っていているのであった。

「はい。そしたらね、今度顔の向きと表情なんだけれど、顔の向きはね、真正面に対して左三十度くらいで顎引き締めてさ、撫で肩のほうにけっこう引き寄せる感じかな。で、そこから視線は右に真正面を見てさ、顔はとにかくスイーティーな表情を作ってもらいたいんだよね。要約して言うなら、どこか頼りなくも甘く淡い哀しみの色を帯びた艶々なまめ々かしい表情ってやつかな。ハハハ、まー簡単に言っちゃえば、数多々あまた々の男を君一人に惹きつけてしまう感じかな。まあ、たとえば眼の前に男がいるとして…だね。君はその男に声を掛けてもらえるような甘い視線を投げ掛ける。みたいなの。自分の中でイメージを膨らませてみてさ、ちょっと作ってみてごらん」

「…ハ、ハイ。わかりました」

少年みたいに熱っぽい顔でまるで立て板に水とでもいうかの如く、面貌々かお々に似合わず女々しくとろけるような業界人の気障っぽい声が小さなスタジオに響いて聞こえた。対照的に若い女のモデルはといえば、何かに怯えたようなはつきりしないもどかしい顔貌々かおつき々でカメラマンの蛮人のように真っ黒い面を見据えていた。そして、日ノ岡の要望に対してか弱そうに頷くと、驚いたことに途端に、経験をそれなりに務めたモデルに負けなくらいに凜と澄ました表情を作って見せた。

「そう。いいねえ、君。さすが期待のニューフェイスだね。それでもう少しだけさあ、哀愁にとり憑かれた瞳で男を意識した感じの視線をこっちに向けてもらいたいんだよね」

「は、はい。………こんな感じ？」

「うん。いい感じだね、平幡さん。ナイスだよ」

細かいリクエストにも苺夏は難無く応じる事が出来ていた。カメラマンは満足感を表すようにストロボに直々す々ぐ目を遣り、ちょ

こちよこと小刻みに幾らかレンズを動かして被写体の若い女を覗き込んだ。

「それで最後にさ、またお尻のところをぐつと胴体からだゝから反らしてセクシイに見えるようにしてもらいたいんだよね。左のほうに意識して少し大胆に反らしてごらん」

「えっ、……あつ、……ハ……ハイ」

と、彼女は言葉を詰まらせながら頷いたが、ここにきてどういふわけか頭の中が急に真っ白になってしまい、一時の間ではあるが呼吸は些か荒い息遣いに変わり、それまでの体勢を作ったままで身動きも金縛りにあつたように取れなくなり、何かに怖れ戦へおののけいたのかしきりに両眼を瞬へしばたたき始めた。表情へかおもみるみる熱病に罹つたように赤らんでゆく。

「……あつ、お、おい！……どうしたの、平幡さん。また気分でも悪くなつたの？」

ストロボの中を覗きながらあと少しで撮影前の最終調整に入ろうとしていた日ノ岡は、面喰らつた顔して被写体であるモデルの女に憂色を帯びた声色で話し掛けた。

「……………」

「……………あつ……え、……ええと、大丈夫……です……………」

「平幡さん！」

彼は動揺を隠せず直ぐさま若い女の元に歩み寄つた。

「……大丈夫です。……ま、また……トイレに……………」

突如起こつた急な変化に理由へわけへがわからず、狼狽と苦渋の表れた面貌へかおつきで安否を気遣つてくるカメラマンに対し、モデルの若い女は、何とか聞き取れるであろう小さな声で心配ないと伝えたが、それは涙を流した時のように震えていた。顔は異様に林檎へりんごへのように紅く火照っている。前髪からは一筋の汗が頬を小川のように伝つていった。盛夏は胸の鼓動が今までに有り得ないくらい、異常に速くなつてきたのを自身で感じた。それと同時に、脚から胴へとぶるぶるとした感じが小刻みに身体の中を奔へは

しゅってくるのがわかった。

「……す、すみません。……日ノ岡さん」

その場にいるのが堪えきれず、彼女は涙声でただ一言だけ謝ると、恥じらいのためか顔を両手で大きく覆い隠すようにして、幾分早足でトイレのほうへと離れていった。

(……どうしよう……わたしの所為……せいで……また、……あたしのせいで、あたしのせいで、……また撮影がで中断してしまつたわ)

苺夏は洗面台の鏡の前に立ち、陰鬱に陥つた自分の心が眼の前の相貌へかお々に表れるのがわかると、泣き崩れるように先程と同じく顔を深く両手で覆つて、数分間立ち尽くしたまま微動だにしなかつた。突如としてまた襲つてきた“あの感情”が、新人モデルだけに垣間見れる特有の透明な輝きさえ失わせようとしていた。前回は何とか切り抜けられたが、今回はもう駄目かもしれない、そんな悲観的な想いが俄かに募つてきた。何が起つたのか、どうすればいいのか訳がわからず暫しのあいだ若い女は悶えていた。

(……またくるぞ、きつと……)

(……またくるよ、きつと……)

(……そしてまた顔はあからむんだ、きつと……)

(……えっ?……)

(さっきのあの気持ちは本当に何の前触れもなくわたしの胸を掠めたのかしら……いや……いや、違うわ……)

煩悶とした表情で身動きを取れず苦しんでいると、ふと心中の奥底から仄々ほのか々に、男の低い野太い声と若い女のか細い声、そして男か女かはわからないが子供の喋るような甲高い声が続けざまに過ぐよぎつていった。一瞬耳を疑つて、再度それら幻の人声に耳を澄ませようと苺夏は両耳に手を当てたが、もうそれきり何処からも聴こえてくることはなかった。しかし彼ら架空三人の語調は静かであつたが、彼女の耳には眩々しかくと聞こえ、現在……いま……の心境を見え透いた一言半句は、とにかく胸を潰される思いであつた。若い女は途方に暮れたのか悲嘆雑じりの吐息を大きく漏らした。

（頬が真っ赤に染まってしまつてしまつくらい、…恥ずかしい気持ちだが、次もまた…、次もまた起こつてきたらどうしよう、ホント……）

そう考えると盛夏は、空怖くなって思わず顔を床に伏せて、少しばかり固く瞼をぎゅつと閉じたままでいた。まさにこの、“突発的に悪い変化が急に前触れなく現れてきたら”という近い未来に対する予期できない不安や恐怖が、本人の潜在意識下に溜まつてしまつたと、表面で活動している心とは無関係に、発作的に突然その不安や恐怖といったマイナスの観念が現実具現化されることとなり、日常生活のあらゆる場面で支障をきたしてしまうのである。この若いモデルの女のケースを見ると、午前中に一度恥じらいの心情がふいに湧いてきて顔が赤らんでしまつたという体験が、潜在意識という心の奥底にある意識でない領域に知らず知らずのうちに刻み込まれてしまつたため、午後の撮影間近に来て突如としてまた、無意識のうちには午前中に生じた体験が現実というノンフィクションのストーリーに撮影の中断という一頓挫を生み出してしまつたのである。

（平幡さん。俺だけど、聞こえる？）　しびれを切らして、カメラマンはまたトイレの前までやってきて声を掛けた。どのくらい化粧室の鏡の前でそうしてやって悶々としていたことだろう。盛夏は未だ胸中の整理が出来ず沈んでいたが、聞き覚えのある声にハツとして我に返り、俯けていた顔を素早く上げて、思わず外のほうに視線を移したのであつた。

「…あつ、すみません、もう大丈夫です。今戻ります」

「君、本当に大丈夫？」

モデルは、今立っている洗面台の前から些か高声に自らのコンディションが回復したことを伝えたが、その声遣いは頼りない感じにカメラマンには聞こえた。

（口先だけ、もう心配はないと言われてもね…二度ある事は三度あるっていうし……）

日ノ岡は、憂慮とも呆れともつかない苦々しい表情がこぼれ、彼女がトイレから一刻も早く出てくるのをドアの側から見守ってい

た。

「…あつ、一回もこんなことなっちゃってすみませんでした。日ノ岡さん」

「……………」

「…すみませんでした、ホントに……………」

カメラマンは神妙な面持ちで腕組みしたまま無言だったので、新米のモデルの女は心底申し訳なさそうに謝り、深々と頭を下げた。

「……………っていかさあ、。君さっきより顔蒼白くなってるけど大丈夫なの？」

「えっ…わたしの顔が…ですか」

苺夏は、自身でも信じられないといった様子で頬に指先を軽く添え、目を白黒させながらか黒い面貌「かお」を怯えるように仰視した。そしてまた、洗面台の鏡で確かめてこようかと後ろを顧みた時、

「もう今日は撮影はしないから。こんな調子じゃあね。マネージャーの黒川さんには伝えておくよ」

「…えっ、……………いや、あの……………そんな……………」

カメラマンは無念そうな遣り切れない表情を見せてそう告げた。モデルがうるたえて言葉に詰まっているのを見るに耐え兼ねたのか、日ノ岡はそれから何も言わず黙ってスタジオの奥の部屋へと退いていった。

(……………そんな、…そんな……………どうしよう、あたし……………)

感情がおのずと高まり、瞳の奥に泪が自然と溜まってきたのがわかった。気が気でなくなりつつも苺夏は、ついさっきまでHIDのスタジオライトが背後にある円形のレフ板に煌々と照りつけていたところまでゆっくりとした足取りで戻っていった。がしかし今は、眩しいくらいに放たれていた人工の光は、彼の撮影中止の判断によって消されていた。その隣にある一室ではドア越しに、日ノ岡が何やら頻「しき」りに、携帯電話で誰かと話をしている声が耳に入ってきた。おそらく、事務所の若い金髪のマネージャーである黒川であろう。苺夏はまた、脚から上半身のほうへ胸震いが奔「はし」っ

てきたのを感じた。

(この先わたしは……………この先……………わたしは、……………どうなってしまうんだろう……………)

未だ初日だというのに、言いようのない濃い不安の靄が彼女の心を侵してゆく。誰にも理解へわかへってもらえない遣る瀬なさともどかしさが胸中でじわじわと葛藤し始め、眼に見えない何者かが己の精神の自由を奪い去ろうとしている。明日という闇に恐怖さえ感じたのか、頭の中はまた真っ白になり、一筋の水滴のような洩へなみだへが無意識のうちに透明な白い頬を伝っていった。

「あつ、あのさあ平幡さん。五日後の水曜に再撮影したいと思うからさ。まあ大丈夫。今回の雑誌に載せるやつは未だ猶予あるから、心配しないで本当落ち着いてやってね」

「……………来週の水曜日…にまた此処に来ればいいんですか？」

「そう。黒川にもさつき俺が伝えておいたから大丈夫だよ」

もしかしたらもう今日きりで私のモデルとしての仕事はないのかもしれない、そんなふう以最悪な現実のシナリオを頭に思い描いてしまっていた盛夏であったが、カメラマンに撮影延期の話を告げられると、表情へかおへにはあらわさなかつたものの、心中ではホツと安堵の吐息を洩らしたのであった。

「こんちわ。やつほー彰ちゃん、これ新宿のデパ地下で買ってきた今人気のスイーツなんだけど食べなよ」

「おお黒ちゃん。やつぱ来るの早いな。なんだそりゃ。ブリュレかい？」

後ろを振り返ると、事務所マネージャーの黒川が、愛嬌たつぷりの笑みを湛えて、二人のいるところへはしゃぐように駆け寄ってきた。しかし、朝スタジオを出てゆく前には輝いているように感じられた金髪のパニーテル姿が、いま何気なくふとちらりと見遣ると、どこことなくそれは疲れているように見て取れた。

「おお？ さすが熟練カメラマンさんも、甘いモノには目がないって感じ？」

「いやいや、冴ちゃんには敵わないよ」「このブリュレはね、生地がところどころ崩れてて、焼色も薄めになってんの。で何よりとっつてもサクサクしててさ……」

「へええ。もしかして、ちまたで話題の注文殺到してるっていうあのヤツ？」

「そうだよん」

「冗談も混じえながら彼らが喋々と親しそうに会話しているさまを端から眺めていると、かえって苺夏は負の重力に導かれ、光さえも届かない暗い深海に沈んでゆくような気分陥ってしまった。感情のない飾り物の人形のようにただ虚しく二人のほうを見つめていると、

「あつ、ほら苺夏ちゃんも食べなよ。焼きたてだから美味しいよ」

「おお、そうだ。平幡さんもこっちおいで。今日の事は別に気にする事ないからさ」

女マネージャーは、例のとろけるような人懐こい微笑みを瞬時にまた作り新米モデルにも勧めると、苺夏は遠慮がちな表情へかおぐで、首をちよつとだけ縦にぎこちなく振った。

「彰ちゃん。ねえ聞いて、聞いて。この前の日曜日ね、ウチの事務所の阿河さんと原井君と私の三人でガーデンプレイスで食べ歩きした後ボウリング行っただけけどさー、あたし三ゲームでストライク八回も出しちゃったあ」

「マジで？八回はすごいなあ。そーいや黒ちゃん、あの二人と仲いいんだっただっけ。」

「うん。けっこう週末とかよくみんなで遊びに行ってるよん」

マネージャーに勧められて苺夏は、仕方なくスティッククリームブリュレを口いっぱいに噛みしめた。たしかに普段であれば頼っぺたが落ちてしまうくらいの贅沢なスイーツであったかもしれないが、彼女という“自己”をいま不気味に内面から支配している暗澹たるナニモノかに撃肘へせいちゅうやされてるようで、喉は通ったが何となく、コンビニで買うデザートみたいなきたりの食感にし

か感じられなかった。

一人取り残されてしまうような場面はいつ誰にだってある事だ。気持ちや冴えず沈んでいる時ほど、人の親切や喜ばしい事物を快く受け入れられず、とかく、厭わしく思ってしまうものである。このモデルの女も、そんな人生の“惰性”の法則にもれる事なく、しごく憂鬱な気分へと心の天秤が傾いてしまったがために、マネージャーとカメラマンが温かく接してくれようとしていたにもかかわらず、冬の外気の下に置かれたスープのように一人ぼつんと孤立から抜け出せなかったのである。

撮影は日ノ岡から言われた通り、翌週の水曜日に行われた。午前中だけの予定であったが、またしても彼女は顔を紅潮させてしまう。そこで急遽、午後においても日ノ岡はストロボに眼を遣らなければならず、カメラマンはやむを得ずモデルに対し一部ポーズのカットを命じて本撮影に入った。それでも漸くようやくなんとか、ファッション雑誌に飾られる自身のデビュー作品となるシーンを撮り終える事が出来たが、それは彼女にとって、鉛に始終アタマを抑えつけられているような苦痛の時間ではなかったのかもしれない。“顔が朱へあかやらんでしまい幾度も撮影の進行を妨げてしまった”という悲痛すぎる“現実”は、以後、彼女の脳裡から離れる事はなかった。

“また起こるかもしれない、また起こったらどうしよう……”

一瞬一瞬の場面が重要視される世界に入った事でなおさらなのかもしれない。

“漠然とした言いようのない不安”

ってやつが、やがては“強迫観念”という名の鎖に変わり、数時間後などきわめて近い未来を無意識のうちに縛ってしまうことに對し、盛夏は為す術を知らず、ただただ今はもがき続けるしかなかったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0660n/>

サイドエフェクツ-薬の鎖-

2011年12月19日01時46分発行